

統制によつて眞の道德生活を爲さしめる事であらねばならない。

2 自我と自律活動

1 自律生活

吾人の生活は自然によつて統一して行くそれである。自然の絶滅を圖る事ではなく、之を統一制御して行くべきものである。自然の事實を理性化して行く事である。即自己自身に内在する先驗的規範によつて生活する處のもので、全く眞我の自由實現である。

吾人の生活は、現實に於て實現される。その生活は、時を無視したものではなく、過去の上に立つて將來を豫想し、持續的に進化發展向上して行くものである。此過去の上に立ち、現在に即して、而かも將來を豫想して生活する云ふ事は、自然のあるがまゝの生活ではない。必ずやそこにあらねばならぬ處の調和統一が必要である。

此調和統一是他から強制されて受動的に、或點まで出来ない事はないにしても、併しそれは外部的受動的であつて眞の生活とは言へない。文化生活は先驗我的規範によつて生活

すべきものである。自己の先驗我によつて經驗我を律して行く生活である。全く自己の最高規範によつて自己を實現して行くべき生活で、全く自律の生活である。

(2) 普遍妥當の生活

自然我的生活は、我まゝ、勝手の生活である。心身の赴くまゝの活動である。我まゝ、勝手の生活は、その人へのみ妥當する處の生活である。その人々のみ妥當することは言ふものの、時には其人をも裏切る生活である。

經驗我的生活は、自然のまゝの生活であつて、先驗我的方向を示す貴重なるものが加はらない生活である。先驗我的活動は各人によつて發達の差こそあれ、客觀的、普遍的妥當性を帯びたものである。此普遍妥當性を帯びた規範意識によつて自己を律して實現して行くのが、之が人間生活の本質である。之を助長し輔導して發展せしめて行くのが教育である。教育は此意味から言へば、人間の生活を普汎妥當的に努力する事である。普汎妥當的にとは、結局自我の命令による自律生活を爲さしめる事である。



(3) 自律生活は自他合一

自律生活を輕薄に解してはならぬ。自律生活は、自我の規範によつて自己を律して行くものであるから利己主義も同一視してはならない。自我の最高規範は我まゝ勝手なものでない。自己を深く深く掘つた後でなければ生れて來ないものである。此最高規範によつて自己を律する事となれば、單なる自己の利害關係は全く離れたものである。最高規範の爲めには時々不利益な事も困難な事も表現せねばならない。故にその人の規範が高ければ高い程、その人の生活は、利己主義から離れて行くものである。

人が先驗我的統一意識で、自己を實現する時に於て始めて自他合一の生活となる。人間の生活は自他合一なる極度に至つて始めて人間としての本質を發揮したものである。眞に人間が先驗我的統一意識に立つて活動するならば、自己に對する價值關係を、之を他人に置き換へた時も同一となる。若し自己に對する利益が他人の不利益となる生活ならば、到底お互に協調して生活が出來ない。

最高規範が低い生活程普汎妥當性を缺く。その生活には、衝突は免れない。けれどもそれは發展成長への過程である。教育は兒童の顯微鏡的先驗我をして深く廣くする仕事である。それによつて生活は深くなり廣くなり、自己が家庭の規範に一致し、國家の規範に一致し、人類の規範に一致し、宇宙の規範に一致するもので、尤も徹底したる生活である

4 修身教育上の綱領

従來の修身教授は、往々他律的の壓迫的の押賣的のものであつた。故に自我の命令に依つて生きんごする態度を非常に排斥した。けれ共修身教育は彼等の自我の成長を圖る事にある。故に自中に彼等の自我によつて統制して行く様でなければならぬ。自然的の知情意の活動を道德規範によつて統括制御して自我の成長を圖り、よりよき道德文化の進展に貢獻せしめねばならぬ。他律的の道德教育では、文化人は生れて來ない。飽くまで自由に自我によつて自己を統制して行く自律道德生活に導く事に努力せねばならぬ。兒童の衷心活動に訴へねばならぬ。



3 自我創造活動

(1) 發展生活

人の生活は固定してゐない。自然生活は事實としての一定の、固定した法則に支配されての存在である。けれ共人間の生活は、事實的の一定の存在ではなく、一分一秒も雖も固定を免さないものである。

禽獸蟲魚の生活は、永久に固定して何等の進展がない。全く本能衝動の生活である。科學的にも、道德的にも、藝術的にも何等の發展はない。

人間は先驗我を有してゐる。理想があり自覺があり統一がある。本能衝動活動では満足は出来ない。現在でも満足が出来ない。常に自我の光明に照して、現在よりも高く深くならんこの理想をもつ。現在に満足せぬ處に、各種の障凝を破り、よくよく生きる爲に各種の方法によつて、自己の進むべき道を切り拓いて行くものである。

未だ自己の嘗つて進まざりし道を開拓しよう努力して行く。若し先人の既に通つた道

である事を自覺して進むならば、それは摸倣であらう。併し先人の現に通つた道であつても、それを自覺しないで切り拓いて進むならば、其人に取つては、夫は新しき道である。所謂創造活動である。

自我の活動は到底固定は免されない。一分一秒も發展する。時々刻々創造を爲しつゝ進展する。故に人の生活は立體的に、流動的に進化的に不斷の創造生活である。

(2) 無限の價値創造生活

吾人の生活現象は、價値意識の統一である。之を立體的に見れば、過去現在未來を統一したるものの生活である。故に過去を無視したものではなく、又將來を考慮の中に加へぬものではない。過去現在未來へ連続した處の生活である。故に吾々の生活は、過去の上に新しき自己を加へて新しき自己が生ずる、又其上に新しき自己が建設される。決して過去の古きものを捨ててしまつて新しき自己を作るものではない。創造生活と言へば、古きものを捨ててしまふものも考へるのは甚しき誤謬である。現在の自己は古き基礎に立つて



建設さるべきものである。新價値の創造は、現有の自己の上に清新なる生活を建設する事である。

(3) 個に立つた價値創造

人間の價値創造は、特殊なる個人が特殊なる社會に於て、特殊なる方法によつて、現實の世界に表現する。此特殊なる形に於て創造されたものが文化財である。即科學も、道德も、藝術も特殊のものである。此個性的に、獨自的な處に價値が生ずる。若し萬人が各々同一のものを創造されたならば、その方面はよし發展して行くにしても、大部分は取残され、全く片輪の發達となり終るばかりである。「眞理は一である」は無限を假想しての事である。現實の世界では、只眞への努力、美への努力、善への努力のみである。眞に各自が獨自相に立つて、自己を最も徹底さす處に各種の方面が生じて來るのである。例へば現在の日本の教育界では、八大教育なき言つて大騒ぎをしてゐる。之は前に述べた意味に於て誠に結構である。併し人間は統一的動物である。此八大教育もその根源は一つのも

のであらう。よし一つのものでなくとも、一つのものに統一されるべき傾向を持つたものであらう、此處で注意すべき事は統一は他を消滅する事ではない。より大なる系統の中へ抱擁してしまふ事である。換言すれば分解綜合の仕事である。

故に自己の創造したる思想、事實を主張して、それが爲に他を排斥するは全くの誤つた行き方である。自分の創造したものに生命あらしめる事は、他を排斥する事ではなく、全部抱擁する事である。もし抱擁する事が出来なければ、それは個に立つてゐても他に抱擁されるべき程度のものである。

自己の創造が一大統一性を持つて永久的絶對的妥當性を帯びる事は到底人間では出来ない。殊に無限に創造發展してゐる人間には終局はないにも拘らず、自己の説が永久に妥當するものとして、人に賣る事は眞に自我の伸暢性を知らぬものである。ニュートンの引力説も、アインシュタインの相對性原理も、其時代其場合にのみ眞理であつて、無限絶對のものではなし。



(4) 創造文化の妥當性

文化財は、各自の個性に立つて創造すべきは現に述べた。此特殊に立つて創造したるものが果して價值ありや否や。茲で考へねばならぬ事は、特殊と言ふ事は妥當性がないと言ふ事ではない。只具體的事實として表現されたものが他の具體的事實として表現された形式が、同一でないと言ふまでである。その具體的事實はその本質に於て、先驗我的活動であるが故に、甲の創造は乙にも妥當するし、甲と異なる乙の創造も甲に妥當するのである。之を要するに自我の價值創造とは、特殊的自個を通して普汎的價值を創造する仕事であると言ふ事が出来る。

(5) 修身教育上の綱領

従來の修身教授は、道德の具體内容を固定主義によつて、道德善の型の押賣をしてゐた訓辭なごも教師がかくせよ、かくすべからずで、くだしく教訓して來た。甚だ詰らぬ譯である。修身教育は善の價值創造である。従來の道德文化財を參考資料としてよりよき

善を創造さして行くにある。道德の理想も教訓も自ら創造さすべきものである。

善は常に流轉進化すべきものである。その善は、主觀的に觀れば特殊性を帯び、客觀的に觀れば普汎性を持つてゐる。修身教育に於て今後は、常に善の創造態度に立たしめ、特殊普汎的の創造生活を爲さしめねばならぬ。

4 自我と完全活動

(1) 自個の完成と社會への貢獻

徹底したる自我の生活は、自個の完成であり、環境への貢獻である。果して然らば自我に立つて、自己を完成する事が社會の發展となるか。之は一段の考察を要する問題である。自己の完成と社會の價值創造とは、異つた二面の様であるけれ共、何れも自我の實現に外ならない。故に具體的表現の一事實を、内面的に見れば自己の完成であり、外面的に見れば社會への貢獻である。

文化生活は自我を離れてあるべきものでない。人格者が價值表現の場合に於てのみ文化



は創造されて行くのである。自我を離れての活動は、絶対の特殊、差別的のものである。之では、何等の普遍的妥當的價值を持たない。個人その人にのみ眞であり、善であり、美である。

人間の自我の要求は、自己より環境へ向つて展開されて行く。最初は主觀的に特殊的に表現してゐても、漸次客觀的妥當的に自覺あり統一ある實現を爲すに至るものである。例へば自我の進展するにつれて母の自己の中心は、自己の中にはなくて子の裡に生じ、妻の自己の中心は夫の裡にあり、忠臣の自己の中心は君主の裡にある。自我の偉大なるに従つて自我の要求は社會的なる。飽くまで自由意志の先驗的原理によつて普汎的に實現するのである。故に自個の完成は環境への貢獻である事なる。

個人は孤立したる生活が不可能である。必ずや家庭、國家、世界その中に於て活動せねばならない。之等の環境に於て價值創造が行はれる。文化生活は家庭、國家、世界に於ける現代文化を受納し、而して新しき價值創造を爲し、自己の擴充伸展を圖るに共に環境に

對して貢獻する。吾人の價值實現は、自己の主觀的普遍生活であるけれ共、それに止まらないで客觀的普汎生活を爲すものである。自我による生活は自己の生活であるけれ共、自己一人の生活ではない。萬人への價值表現である。

(2) 個人、家庭、國家、世界の關係

自我によつての生活は、個人各々によつて獨自相を表はす。人は境遇に培はれて獨特の文化を創造する。個性によつて自由なる活動によつて特殊的普遍相を表はし、獨自的表現によつて普遍的特殊相を呈する。

人格生活は特殊自我の表現ではない。何處までも普遍自我の表現である。故に如何に様相が異つて見えても、その根本に於ては融合すべき可能性を持つものである、故に個人の表現の一事實は、家庭人としても、國家人としても、世界人としても、竟極に於て一點に歸するものである。

自我の表現による生活に於ては、個人に立つたとき文化人となり、家庭人となつたとき



文化家庭が建設され、國家人となつたときに文化國が建設され、それと同様世界人となつたとき文化世界が建設される。尙一方より觀察すれば、文化人の意志結合により文化家庭が形作られ、文化家庭の意志結合により文化國が形作られ、文化國の意志結合により文化世界が形作られるのである。

(3) 修身教育上の綱領

自我の實現による生活に於ては、個人、家庭、社會、世界の關係は最も緊密なものである。故に文化的個人主義、文化的家族主義、文化的國家主義、文化的國際主義は、自他合一、主觀即客觀、多即一の考察である。以上の原理より善の價值表現に就て見る。前述したる如くに吾々の生活は、その範圍に於て家庭、國家、世界を離れる事が出来ない。善の價值表現は家庭に於てなされるし、國家に於てなされるし、世界に於て爲される。

家庭生活として當然行はねばならぬ家庭道德、國家生活として當然行はねばならぬ國家道德、世界生活としての人道及國家と國家との間に於ける國際道德が生れて来る。之は何

れの道德にしても只境遇範圍と云ふものによつて極限されて異なる様相を顯はすものであつて、何れも自我の表現に外ならない。善の價值表現である事に於て何等の變りはない。何れも自個の先驗我的要求によつての價值表現である。

自我に於ての善の表現は、時代と共に流轉速進すべき道德生活である。一定の水準で停止する事は免れない。故に國民道德も家庭道德も個人道德も、動的更新活動的のものである。茲に於て家庭道德、個人道德、國民道德、世界道德、國際道德の夫等の各々は、相互に反撥すべきものではなく、自我の根に生ひ立つ幹枝であつて、融和合一すべきものである。修身教育は此根本に立つて進めて行かねばならない。

## 第六章 自然生活の倫理生活化

### 第一 自然生活と倫理生活

自我の成長と修身教育の中樞點と見るべき部分を明かにした。以下詳細に述べて見たい



従來の道德教育に於ては、兒童の眞の生活を無視してゐた。兒童の自然性の抑壓を消滅することに努力する事を以て道德教育の全體だとしてゐた。その結果眞に兒童の道德生活が建設されないで、外見道德や、鍍金道德や、大人の道德が作られた。夫等は一時的の便宜的の假りの道德であつて、兒童としての道德ではなかつた。

然らば永久に兒童をして倫理生活を爲さしめ得るものは何か。道德的活動は如何なる基底の上に築かるべきものであるか。その基底とは何ぞ。

従來無視されてゐた、蛇蝎の如く呪咀されてゐた處の自然性である。兒童の自然生活である。經驗我の生活である。この自然生活を基底として、その上に建設されるべきものである。

従來道德教育は、現實を無視した理想主義の爲め空虚になつた。その後理想を輕視した處の自然主義の思潮があつたが、我國の道德教育は、幸か不幸か、この風潮に當てられずして、今や現實に即した理想主義によつ改革せられなければならぬ時機に到達してゐる。

茲に謂ふ自然性の醇化といふ事は、自然に墮落するの謂ではない。何處までも理想に到達する爲めに、自然を殺さないで、之を基調としてその上に道德生活を建設して行かうとするものである。即ち自然生活の倫理生活化である。經驗我の先驗我化に外ならない。

然らば、兒童の自然生活とは何か。既に述べて置いた様に、理想生活の反面の現實生活であり、精神生活の反面の肉的生活である。之を心理的に見れば意慾本能衝動の生活である。人間は之等の生活を基調として漸次進展向上して行くものである。この自然性を他所にしては向上はあり得ないのである。勿論人間の發展には自然我のみではならない。其うしろには先驗我の貴いものによつて洗練せなければならぬ。夫自身價値が尠い故を以て従來の如く抑壓する譯には行かぬ。發展の基調として大に尊重せねばならぬ。

## 第二 本能の發現と醇化

以下本能と道德教育との關係に就てその大略を述べる事にする。



1 本能の意義と訓練

本能の意義に就て詮索するに、その意見の異つてゐるに驚く。私の言はんとする本能は次の如くである。

豫め経験したる事もなく、習得したる事もなく、行爲の目的を理解しないで、而かも一定の目的に合する運動を行ふ生得的の性能である。

次に之に反對の意見を擧げる。その要點は、経験したる事無いと言ふれ共、實は経験によつて變化する。目的を意識しないと言ふれ共、漸次目的を意識して來る様になる。生得の性能だと言ふれ共、後天的に漸次變化するものである。故に前者は充分の謂ではないこの論である。

併しながら、その論は私の言ふ本能と異つたものである。本能と雖も、固定的のものではない。夫自身過程中のものである。之を三分した學者がある位である。即

低級なるもの、 反射本能

やゝ進みたるもの、 自發本能

高尚なるもの、 有爲本能

で、私の言ふ本能の意義を破壊するものは、最後の高尚なる訓練されたる處の有爲本能を根本として論鋒を向けるものである。

兒童の行爲を起す基調は、本能による場合が殆んどである。或刺激を受けたる時は、それに應じて本能によつて、定められたる一定の方向に活動をする。而して夫等の活動が順次訓練されて行く。それが本能活動の如く見ぬないでも、それは或發現までには、廣義の訓練を受けたものが多い。

例へば、獲得本能でも、最初のもの、食物及び菜果材料の蓄積であつたが、現今に於ては、人類の慾望を満足さすべき一般的價値の蓄積で、能力ある物體の蓄積や、名聲の蓄積となつてゐる。争闘本能でも最初は、性的必要や、食慾的必要や、遊戯的方面の爲に必要であつたが、現今に於ては、あらゆる活動方面に、優秀なる位置を獲得せんとする活動



となつてゐる。求食本能であつても最初は、營養の爲めにのみ必要にしてゐなければ、現今は、營養より一歩進みて、快樂の爲、或は社交の爲めに用ひられてゐる。

かく原始時代の本能は漸次訓練されて、現在では、吾人の考の及ばざる程複雑なる本能活動となつてゐる。之を見ても本能は人間活動の基底である事が知られる。

## 2 人間本能の特質

之を心理學的に見て行きたい。之がやがて道德教育と關係して來る點である。

### (1) 本能の一時性

本能の發生の時季に於て、その發現を促進するだけの刺激が與へられなかつたならば、その本能は次第に薄弱となつて來る。例へば、遊戯本能が、發現の時季に、誤つた父兄の考から、始終室内にばかり引き込まして置くに、其本能は次第に薄弱となつて、友と遊戯する事を好まず、始終家の内に引き込んでばかりゐる兒童となり、及ぼしては、社交性も亦發現しなくなる。

好奇本能でも四五歳位から芽を出しかける。此の際、始終彼等の貴重なる本能の芽を摘みこむ時は、全く氣力なき、受動的の研究心のなき、自己創造に努力しない兒童にしてしまふ事が少くない。恐怖本能でも、交友本能でも、凡ての本能はかゝる傾向をもつてゐる。

### (2) 本能の定期性

本能は一定の時期を定めて發現して來るものである。此機會を見て適當に醇化して行く必要がある。此時機を誤るに、一は不良の方面へ向はしめるし、一は發現の機會を失はしめる。

例へば自己保存に最初より必要なる啼泣や、吸乳の如きは生後直に現はれ、運動の匍匐、歩行等は比較的早く現はれ、性慾本能、社交本能、宗教本能等は、成年期に現はれて來るものである。

### (3) 本能の特化性

下等動物程本能は固定してゐる。けれ共人間の本能は、一定した固定したものでなく前



に述べた様に大體に於て固定してゐるが、それは訓練する事によつて變化され易いものである。

### 3 動物の本能と人間の本能

人間の本能は、一時性を帯び、周期性を有し、特化性を持つ。それが教育上好都合である。動物の新生児は、生れるに直ちに歩行し食物を探る。人間は、母親の助を借らなければ自己の生命を保存する事が困難である。人間の幸福は茲にある。若し生れ落つるに、食物を探る。歩行も出来る。社交も出来る。生殖も出来る。一代の活動は、固定した本能によつて完成されるにしたらば、動物の如く何等の發展も向上もない。

偉大なる可能性を有してゐる人間は、自己の本能を以て順應する事が出来ない時に、頻りに意識を働かして、新しい順應創造を試みるものである。即ち自然生活が徹底しない時には、理性的活動を爲して、自我の命令によつて行動する。

之が人間本能の異なる點である。若し人間本能が、動物本能の如く、不變であり、固定で

あり、出生と同時に、全部の本能を有してゐるならば、別に習慣も作る必要もなく、本能を働かして意志運動を営む必要もない。道德教育も行はれないし、従つて向上もあり得ない。

斯く人間の本能は、動物本能の如く完全でない。従つて夫れ程貴重ではない。併し數に於て少く、質に於て不完全であるにしても輕視する譯には行かぬ。人間の營む所のあらゆる活動は、人間の所有する所の本能である。この生得的の傾向によつて活動して行く。進みは道德的行爲が行はれて行くのである。

勿論諸種の本能は、原始時代の遺産であるから、全部が一樣にそのまま、現代生活に適するものであるとは言へない。又見方によれば、恐怖本能や、争闘本能の様に、全然不必要だと考へられるものもある。

けれども、時勢の變遷によつて表現の仕方が適當でないのであつて、其本能的心狀は何れの時代が來てもなくてはならぬ活動の基調である。







幼児が吸乳する事は、吸乳後に於て自己の心身上に、如何なる影響變化があるか、何等考ふる處がない。併し自ら成長の目的に合してゐる。其他々人のものを自由にする蒐集本能であつても、自分の玩具を頻りに破壊する處の破壊本能であつても、何もその結果を想到するものではない。

(2) 運動を生ぜしむる目的物の觀念を缺いてゐる

幼児は乳の何んたるかを知らないで之を飲み、而も目的に合してゐる。子供は色々の物を集める事を喜ぶ。紙箱、壘、紙片、木片等見付次第慾求する。如何なる効果があるか。その様な事には一向構はぬ。蒐集したならばそれでよいのである。而も生存の目的に合致してゐる。

(3) 爲さんとする運動の性質を知らないで之を行ふ

幼児は、親の外出の時必ず跡を迫ふ。而かも途中如何なる難儀があるかを考へない。詮方なく連れて行くに暫くするに疲れて泣き出して歸る事を要求する。

以上の如く、本能活動は、自己内心に、何等の目的も方法も持つてゐない。又對象物に關しても何等の觀念を有してゐない。且つ自己に對象物との間に起る活動の方法杯は、もごより意識してゐない。斯く意識しない活動でありながら、而も價値あり意義ある活動となすのである。

其目的も方法も意識しない本能は、遺傳的の生得的の傾向である。動物を恐怖して逃走する。人々交る事を好む。等凡て人類の自然である。かゝる自然生活に對しては、何等責任がない。善惡の評價の對象とする事は出来ないものである。

兒童の、食ふ事を慾する、歩く事を慾する等の營養本能や恐怖する、怒る、競争する、喧嘩する保護本能や、物を尋ねる、遊ぶ、模倣する等の順應本能や、多勢に遊ぶ事を好む等の社交本能等を評して善惡を決定する事は出来ない。

従來の道德教育其他に於ては、之を道德活動の如く評價し、而して道德律によつて云々してゐた。之は大なる誤謬である。夫等の活動は、無道德性のものである。何等不道德性



を帯びたものでなく、道徳的のものでもない。無道徳性のもを眺めて、道徳的に彼は評價する事は出来ない。

従來の道徳教育上、この誤謬が頗る多かつたのである。今後は、生來の本能を土臺として、それを助長し、變化し、轉移し漸次進展せしめて行かねばならない。無道徳性の本能活動を、單に壓制し或は消滅を計つてはならない。

然るに茲に一段の考察を要する事は、教育を受け、経験を積み、相當の自我の命令によつて活動をなす事が出来る者が、本能活動をなしたる結果、若不良であつたならば如何に批判するか。この場合に於る道徳的責任問題は、前者は聊か異なる處がなければならぬ。

本能そのものにしては、前者は何等變りはない。全くの無道徳性である。前者は未だ教育を受けたる事少く、且つ経験も少く、従つて自我によつて本能を制御する力がない場合であるから責任を問はない。

けれども人間は、本能の力によつて生活を開始するのであるが、高等動物たる人間は、

動物以上に自我によつて活動せねばならぬものである。然らざれば下等動物と異なる處がない。人類の特徴は、實に理想によつて本能を統御して新境遇に應じて行く處に價值がある、斯く本能の制馭云ふ事に就て、相當の修養と能力を具へてゐることを認めらるべきものが些細の事に憤怒したり、争闘したりした時には、其の本能活動を道徳の對象として判定せねばならない。

然るに従來に於ては、本能を直に善惡の對象としてゐた事である。例へば憤怒、争闘そのものを直に道徳上の批判對象とされて、之を惡としてゐた。而して、之を消滅さす事に勉めてゐた、之は誤謬である。

本能其ものは、前述の如く善惡評價の對象物ではない。故に道徳上より本能を見れば、假令経験あり、教育ある者であつても、本能を以て直に善惡の評價を下す事は出来ない。只本能的活動を爲したる場合に於て、その結果善ならざる時は、其本能的活動を醇化し善化しなかつた點を責むるべきものである。



(4) 本能は道德の基底

以上述べたる如く、本能は性格形成の土臺なるものである。幼児の本能に習慣は、殆んど道德性のないものである。けれども道德生活の土臺をなす、この土臺の上に、道德を建設して行く事に努めなければならぬ。従來の如く大人の道德を着せる爲め彼等の本能を消滅さす事は誤である。

本能は、抑制すべきものではなく、之を醇化すべきものである。本能運動は、遺傳的のものであらうけれども、反射運動の如く形式の確定した不變化のものではない。之に適當の處置を加へて或程度まで之を變化せしめて道德教育の目的に副はしめる事ができる。

第三 衝動の發現と淨化

第二に人間活動の一部の基調となつてゐるものは衝動である。之は中々人間活動の上の大なる勢力を持つものである。

1 衝動の意義

衝動の意義に就ては、本能のそれよりも一層不明瞭である。使用されてゐる人によりて非常に異つたものである。

さて兒童の毎日の生活を見るに、將來さか、現在さかを、顧慮しないで、全く感覺的に利那的に、刺激に任せて活動してゐるのである。この様な活動が全部かと思はるゝ位である。大人の活動にしてもこの様な活動の場合が尠くない。況して兒童の生活は、その範圍が廣い。

例へば、兒童が大勢で走り廻つて遊ぶ。非常に咽がかはく時、水を見出すに、大喜びで腹一杯飲む。その時の活動を見るに、將來さか、目的さか、方法さか何等の思慮撰擇を持たない。

誰れの所有權に屬するものか。

衛生上害なきものか。



それ位の分量が適當か。

飲む方法は如何。

飲みたる後に如何なる結果が起るか。

之に代るべきものはなきか。

等の考究はしない。刺激と行動との間に何等の間隔を挟まない。子供は勿論兒童であつても、喧嘩する場面が多い。例へば甲が乙を侮蔑する。乙は直に怒つて甲を木片にて擲ぐる。甲は泣き出す。復讐として石を投げ付ける。二人を呼んで教師が威丈高になつて裁判して見ても、何だか一向要領を得ない。教師は大人の心理から、何かの理由を握らうと縦横から發問する。兒童は答ふべき理由ないから黙してゐる。教師の方では執拗なるものにして時々疥癩玉を起す。兒童は恐怖して心にもなき事を白状する事がある。如何なる考のみに甲を擲つたか。甲を擲つたらその結果は如何になり行くか。之を擲る爲めには如何なる方法であるか。杯は質問した處で、乙自身は知つてゐるものでない。只年齢の稍進みたる

ものは、活動したる後、更に過去を追想して見るべき、侮蔑されたから擲つたのであらう如何なる方法で以て實行しようか、計画的に實行したのでは無かつたが、今考ふれば、あの順序によつて擲つたのだと知る事が出来る位である。不良行爲であつた事も、實行後にはそれと知る事が出来るだけである。要するにこの活動は、過去を知る事が出来るだけである。以上の例の如く、我々人間の活動中には、或刺激によつて直に活動を起す場合が尠くない。兒童の生活はこの活動が大部分を占めてゐる。

茲で私の謂ふ衝動の意義を大要次の如く約言して置く。「衝動は、刺激の現はるゝと同時に、直に外部に向つて運動を起すものであつて、意識の傾向を持つものである」。この衝動による動作は、思慮の結果によつて現はるゝ意的動作との對象として考究さるゝもので、單に内部的壓迫によつて、理非如何を顧みないで發動するものである。

腹が立つと、直に人を撃つ、菓子を見れば、直に採つて食ふ。渴する時水を見れば、直に之を飲む。喜ばば、直に踊る等、刺激によつて直に運動を起すものである。而かも對象



たる人を知り、菓子を知り、水を知る。之が特徴である。

2 他運動と衝動

(1) 情緒と衝動

衝動は、情緒と密接なる関係を有してゐる。むしろ両面とも見るべきであらうか。情緒は強烈なる有機感覚を本質としてゐる。恐怖、憤怒、喜悅、嫉妬等の情緒は表現するや、静止せる状態ではなくして、吾人を肉迫して行動を起し、自己を實現しようとする発動的の要求を持つ。刺激と同時に人の心を衝いて動かすものである。

(2) 反射運動と衝動

衝動運動は、刺激物を意識してゐる。之に對する感情をも有してゐる。即意識的運動である。故に刺激より知覺に移り次に運動に現る。然るに反射運動は、或刺激に對して反應して運動を起すものである。故に刺激より直に運動に移る。例へば、左の手を振つた。それは無意識的であつた。後で見ると蜂がさしたのだと知つ

た。之は反射運動である。然るに衝動は、蜂が刺した事を意識する。さされて苦痛と不快の情緒が起る。如何にして之を除くか、その方法は考究しないが、その刺激と同時に、手を以て之を打つた時の運動である。

(3) 本能運動と衝動

本能運動と、衝動運動とは、その區別殆んで明かでない場合が多い。衝動運動の型なつたものが本能運動だと思へた人もある位である。

強いて區別すれば次の點による事が出来ようか。衝動運動もその心状は先天的である。然しながら、之を表現する方法は、人によつて異つてゐる。嘗て經て來た或る活動を基調として、不知不識の間に行はれる。本能は心状、表現ともに、先天的の同一の型である。刺激と運動との連絡が、先天的に殆んど一定しるる。

(4) 慾望と衝動

衝動は、何等の思慮選擇を用ひずして、盲目的に發現するものである。然るに、この衝



動が満足されない時には、不快の感を起し、意識を働かして思慮する事となる。即現在を意識して、將來を考察する時に、缺乏の感を起して慾望を生ずる。慾望は直に運動して現れないで、思慮選擇が行はれる結果、或時間を要する。衝動は、思慮選擇なくして直に運動に移る。

例へば、衝動は、渴したるものが、眼前に一杯のコップの水を見るや否、之を取つて飲む。然るに慾望から行爲に移る處を見るに、渴したるもの、眼前に一杯のコップの水を見るときは。

- 1 現在の状態即ち渴してゐる不快や、之を飲んだ後の快感を豫想する。
- 2 何の爲めに飲むかの目的を意識する。
- 3 方法を考究する。思慮する選擇する。眼前のコップの水を飲まうか、湯にしようか。所有權は誰か。衛生上差支なきか。如何にして飲むのが尤も適當か。
- 4 愈水を飲む事に決定する。

此間に相當の時間を要する譯である。以上の如く他運動との區別は困難であるが、強ひて求むれば以上の如く見る事も出来よう。

### 3 衝動運動の目的

衝動運動の心状は、生得的で表現は後天的である。而かも心状と活動との間に、思慮選擇のない行動である。

かゝる衝動の目的は何處に存するか。過程か。結果か。目的運動は目的物即運動たる結果を標的としてゐる。然るに衝動運動は、結果でなくして活動そのものである。

例へば或人に侮蔑された。腹を立て、甲をなぐつた。此時、乙が甲を擲つたその事が目的か。又はその結果が目的であるか。

その場合結果を考へるに、擲つた直ぐ或瞬間には満足感が起るかも知れぬ。併しその結果は、永續的のものでない。直に不快の感が起つて来る。裁判沙汰になれば猶更不快である。衝動は、單に内部的壓迫に藉られて、止むを得ずして、活動したもので、活動その



ものが目的である。故に活動が済めば、それで満足さるゝものである、敢て結果の如何には拘らない。子供は嬉しければ座敷を走り廻る。何と言つても聞かない。矢鏢しくて困る何の爲めか聞いて見ても知らない。只何もなく静かにして居居る事が出来ないと言ふだけである。子供が走り廻る事夫自身が目的であつて後に起り来る疲勞などは考へない。

人間の活動の大部分には、この結果の目的に直接關係してゐない衝動活動が多い。大人の活動は、常に合理的に考へる結果、衝動運動を排斥するが、少し徹底的に吾人の生活を凝視するときに、活動そのものを目的としてゐる活動の多いことに驚く。衝動はかくの如く人間活動の源泉を見る事が出来る。

#### 4 衝動の盲目性

かく、人間活動の、貴重なる源泉である所の衝動が、何故、従來に於て排斥されたか。之は前に述べた如く盲目性であるからである。

何故盲目性であるか。之を心理的に考察する。情緒が吾人を衝いて、或る運動を發現しようとする際に、精神内部に於て、極端なる類化作用が行はれる。自己實現に、最も都合のよい意識内容のもののみ喚び起し、之に反するものを悉く禁止して、意識界を獨占しようとする。此時良心作用は、少しも這入る餘地がなくなる。衝動活動が一旦活動し始むると、唯瞬間的衝動的に實現にばかり全力を奪ひ取られ、其他を顧る餘力を失ふのである。故に従來、衝動を盲目的なものとし排斥し壓迫を加へられてゐた所以は、此處にある。然しその熱烈なる事、眞摯なる態度は是以上のものはあり得ない。衝動が人間活動中最も熱烈なりと言はれてゐる所以も茲にある。

従來の道徳教育は、此衝動を以て惡方面とし、之を嫌忌し、その抑制し壓迫を加へてゐるのである。而して全然目的方法を意識する良心生活のみを以て人間の生活とし、此自然性を皆無として、早く良心生活に繼ぎ替へる事に努力してゐた。衝動に對して壓迫を加ふる事や、之を薄弱ならしむる事や、之を抑制する事は活動的な人間を殺す事となる



血あり涙ある人間性を葬る事なる。之を殺して置いて之に代ふるに合理的の道德を建設する事は、誠に至難の事である。形式的には完成された様でも、内面的には空虚である。而して血も涙もなき干乾びた、枯渴した、打算的の生活になつて来る。

道德は、目的による行爲のみを生命とする事は勿論である。けれ共それは、自然性の上に建設された場合の事である。若し自然性を無視して、合理的にのみ努力したならば、甚だ人間の貴いものは失はれて、人間相互の干乾びた生活になつてしまふのである。

#### 5 衝動の悪化と教育

従来、衝動は、道德教育上抑壓と消滅とに努力して、目的の方法を意識する生活を以て全部とみなさんとした。けれ共衝動は、單に外部的に壓迫を加へる時は、人としての慾望目的までも、之を度外視し、蔑視し、活動を停止する。

又、如何に外部的に單なる壓迫と制裁を加へたとしても、必ずしも根絶されない。のみならず、壓せられたる草木が外物を飽くまで排して、曲りくねつていぢけて伸びる様に、

人間としての目的活動さへしなくなり、其上漸次悪化して残忍性の衝動となり、破壊性の衝動となつて表はれる。殊に衝動は、盲目性のものなるが故に、若し悪化したならば、より以上危険性を帯びて来る。

幸にも心状は先天的のものであるけれ共、それが發現は後天的の經驗的要素が含まれてゐるが故に、教育と環境によつて善化する事が出来る、死と破壊とに向ふ衝動を生じ生長へ向はしめる事が出来る。

衝動を淨化して、理性的衝動に向はしめることは、現在の衝動を消滅せしめて、之に他のものを入れ替へる事ではない。それそのものを基調としてそれを淨化して行くべきである。恰かも草木が生の衝動によつて伸び、而して自然の立派なる發達を遂けてその獨立的價値を發揮して行く如く、衝動の中心生命によつて、人格の完成、個の伸長を圖らねばならぬ。

道德上この衝動を基調として、之を淨化し以て自己を實現せしめねばならない。



#### 第四 本能衝動の純化と淨化

以上論述したる事によつて、本能衝動は、道德教育上の基調となるべきもので、之を従来の教育の如く、抑壓し、又は消滅さすべきものではない事を明かにした。

何處までも之等を變化せしめ、擴充せしめ、而して眞道德の建設をはかり、人格の向上を圖らねばならぬ。本能衝動は、人類發生の歴史から、必要に應じて生れ來たものである故に絶對的に不用だと言ふものはない。社會が進んだ今日に於ては、假令不用のものがあるにしても、それは適當の處置によつて純化し淨化し、根本動力として活用をはからねばならぬ。

左に純化し淨化すべき大綱を述べよう。

##### 1 境遇を整理すること

本能衝動は、或刺激のもに發現するものである。故に若し現代の社會を以て發現せし

めない事が教育的である場合は、單に發現せんとするものを抑壓するよりも、境遇を整理し、豫め發現するの機會を作らない事である。之は消極的ではあるが、本能衝動に對しては相當の效果を持つものである。

例へば、子供の欲しがらるもので危険なものは、之を整理して兒童に見せない事である。之は家庭でよく行はれてゐる事である。學校などでも特に上級生に注意して惡戯をなさぬめないで境遇を整理して、低學年のものに不良の方面を發現せしめない様にすることがよい。相當なる年齢になるに不良の活動寫眞や、書籍を見せない事なども注意すべき事である。

##### 2 適當なる時機を見て、之を刺戟し發現の促進をはかる

本能、衝動は、或時期に機會を得たならば、特に成長し、若し適當の機會を與へなかつたならば、折角の發現も極めて薄弱なるものとなる。道端に捨てられた朝顔も發現の時季が來れば、本能衝動に藉られて芽を出し根を卸し、蔓を伸し、花を開き、實を結ぶ。併しそれは誠に貧弱である。苗をたて、本圃に移し、適當なる手入れをなし、肥料を與へる事に



よつてその朝顔は、より以上の獨立的價値を發揮する事が出来る。  
 人の活動に於ても、善になるものは、之が機會を充分に與へて發現せしめる。しかする事によつて善良なるものは益々伸び、之がヅン／＼伸びる事によつて、不良なるものは自然に發現しなくなる。

同情本能の機會を作つて發現せしめる。鶏なごを飼養せしめ、夏蟲なごを飼養せしめる。犬猫を飼ふ任務を與へる。その様な事によつて殘虐本能は頭を引き込めて仕舞ふ蜻蛉の尻を切る。蛙の皮を剥ぐ、蟬の翅を切る等は自然にしなくなる。

尋一教科書「生き物を苦しめるな」なごも、同情本能を刺戟する方がよい。「なまけるな」なごも積極的に一生懸命に指導せしむる方面に努力する方がよい。「喧嘩をするな」なごの個體維持本能の争闘本能や争闘衝動を壓迫するよりも、彼等の芽生わかけてゐる社會本能を刺戟して發現せしむるがよい。

従來の如く、第一の方面へのみ努力する時は、禁欲生活に墮落してしまふ。第二の方案

によつて積極的に善良なる方面の發現を計り、人間をして益伸暢せしめる事に努力すべきである。

### 3 活動に感情を伴せしめること

現代の社會生活に於て、善良なる本能衝動活動の結果には、満足なる感情、愉快なる感情を伴はしめ、不良なる本能衝動活動の結果には、不満足なる感情、不快の感を結合して自然に發現、又は不發現に努力せしめる。

本能衝動の結果として、快不快の感情の伴ふ事は自然である。行動に對して常に、快感が伴へば益之をなし、不快の念が結合される時は、漸次發現しなくなる。之を深刻に伴隨せしむる事によつて、敢て壓迫しないで自然に純化され淨化されて行く、

尋一教科書「過をかくすな」に於て、始終恐怖本能や逃走衝動のみに依頼して道德教育を計つてゐるに、その爲に過をかくす兒童となる。それよりも、かくさない爲めにはかくさない時に伴つた感情を云ふものを味はす事が大切である。かくさない時に、満足の感



や、快感が起れば、再び之をかくす事はなくなる。「自分のもの」に於ても注意すべき事が多々ある。子供は五六才から十歳位までの間に於て人のものを盗むものである。之は蒐集本能から發生する。最初一回二回之を爲す事によつて、父母、教師その他に發見されない時は、之に伴ふ快感によつて度々繰り返す。若し習慣となるに矯正するに非常に困難である。最初知りたる時は、彼れに大なる苦痛を與へる事がよい。これも懲罰なきよりも、彼れの第一貴重にしてゐる處の嗜好品を沒收して彼れに不快の感を與へる事である。之によつて大抵成功する。度重なつたものは特別の方法を講ずるの外はない。

4 行動の變化に注意すること

時代の推移と共に原始的の本能衝動も順次變化せしめて行く事に注意せねばならぬ。只現在の社會生活に適せぬから言ふので抑壓すべきではない。前にも述べた如く、その時代も現在もその心狀に於ては何等變りのないものである。その表現に就て、社會組織上變化せしめなければならぬものがある。

假令ば、争鬭本能は野蠻時代には極めて必要なるものであつたが、現在の文明に於て、社會の秩序が整然たるに於ては、原始的の争鬭は惡である。之を變化せしめて、裁決を仰ぐ事にせなければならぬ。

第一修身教科書「喧嘩をするな」に於ても、單に喧嘩は惡だからとして抑へて行つてはならない。よく結果から考察せしめて充分に之を味はしめねばならない。

第二教科書「規則にしたがへ」等も單なる外部的制裁のみより説いてはならぬ。彼等の本能衝動の發現も肯定してやらねばならぬ。而して一方社會生活の實際に従ふ事の時代生活に適したる事を納得せしめねばならない。

5) 反面の本能衝動を獎勵する事によつて醇化せしめる

不良なる本能衝動を、善良なるものに導き入れる。一の善良なる本能衝動に全勢力を注がしめるに、一方に於ける之の反面の衝動本能が、勢力衰微して、自然に醇化されて行く物を破壊する如き兒童には、建設的のこゝを與へ、喧嘩好きの兒童には、特に團體競争



に努力せしめ、性欲發動の時事には、大に運動を奨励する事等が肝要である。

尋一教科書「始末をよくせよ」に於ては、彼等の感覺的満足、知的満足の反面に合理的價値觀を構成してやる事である「もし之が無かつたら」云ふ經驗を幾度も味得さして、自然に整頓に導き入れる事にせねばならぬ。

x x x x x x

以上は、主として、客觀的の方面であつて、比較的價値が尠い。眞に本能衝動として道徳的に築き上げるものは自己でなければならぬ。自己そのものでなければならぬ。自己の良心によつて本能衝動が統制されて行かねばならぬ。併し之が理想的になるまでには、自ら過程がある。

(6) 本能衝動の統制(他律的初歩)

本能衝動は、或刺戟のみに或機會に發現するものであるが之等も、茲に述べたる如く感情の伴ふ事が多い。而して快感の伴ひたる時には之を繼續し、不快の感の伴ひたる場合

は之を中止する。

それ等の快不快には、自己自身より起るものも他より外部的に與へらるゝものとの二種がある。第一歩としては外部的のものによつて自己の行動を左右して行くのが殆んどである。

此時季は、なるべく短いのがよい。若し教育を誤るゝ終生之で終る事もある。こもかくこの外部的に伴ふ快不快によつて純化され淨化されて行くのである。之も未だ完全なるものとは言へない。

(7) 本能衝動の統制(他律的第二歩)

前者は、本能衝動の活動に伴ふ直接の快不快によつて純化され淨化されて行く。然るに一段進むときは、活動直接の快不快よりも、自己の活動が社會に嘉納さるゝや否を考察して、社會に容れらるゝものは表現し、容れられないものは表現しない。かくして順次社會的に訓練されて行くのである。



8 本能衝動の統制(第三步)

第二步は何れも實行後に伴ふ感情によつて、他律的に本能衝動を統制して行つたのであるが、之れは未だ完全とは言へない。第三步は、活動前に考察する事である。併しその対象は矢張り他律的で社会的である。實行後に於て社會より嘉納さるゝや否を考究する實行後、社會より認容さるゝを判断する時は努力して實行する。若し到底社會に容れられないとするならば實行しないと言ふのである。

前者に比して、先驗的に本能を統制する點は一段の進歩である。

9 本能衝動の統制(自律的)

以上の三階段は、何れも本能衝動を統制する尺度が自己以外にあつたのである。而かも機械的に統制して行つたのである。之は未だ完全なものとは言へない。終局は、自ら理想を立て、その理想の尺度によつて、自律的に本能衝動を統制して行かねばならぬ。

この段階になるに、實行後の快不快は勿論、社會の嘉納不嘉納、所謂世間の毀譽褒貶は

眼中にない。自己の信する處によつて統制して行くのである。茲に至つて、眞に自我に立脚したる道徳が建設されるのである。

本能衝動の良心的統制に就ては後章に於て述べる事にする。今參考として教科書の取扱の一部を述べる。

第五 尋一教科書取扱の注意點(拔萃)及教授の實際

|| 本能衝動の純化、淨化 ||

第一 よく學びよく遊べ

1 家庭生活に於て殆んそ本能衝動の生活を續けて來てゐる。由來家庭生活をして來たものを、直に學校生活の型に嵌めてしまふ。併し家庭生活と學校生活との間には、大なる溝がある。さうする事によつて、兒童の成長は、甚しく障害される。寧ろ兒童の活動性は全く停止されてしまふ。よく吾々の感ずる處の、一年はおこなしい。二年は少しがざつと



三年はいたづらの頂上だ。と言ふが、之は誠に怪しからぬ譯である。

一年は最もいたづらで、二年三年は順次眞面目に微弱ながらも自我的になるべき筈である。之は教育の出発點が誤つてゐたのではあるまいか。

入學當初の兒童の實際生活に大なる壓迫を加へるから起る弊害ではあるまいか。一時に自然性を消滅さして迄、型に入れるものでなくして、漸次自覺的に順應させる様に苦心せなければならぬ、其處に尋一の教師は苦心がある。單に彼等の恐怖衝動に訴へてやるならば何の譯もない事であるが。

2 なるべく彼等の模倣本能を活用するのがよい。單に凡ての心得を、かくすな。かくせよ。によつては成効しない。それよりも、教師の模範や、上級生の學習態度の參觀や、一般兒童の遊戯の模様を參觀させなごして、彼等の模倣心をそれもなく刺激するのがよい。多事多訓をして彼等をいやがらせ、退屈させても何等の効果を生まない。學習態度が自然に薄らいで行くばかりである。

要するに、餘りコセ／＼言はないで、自然の中に指導を見出し模倣、暗示を利用して、それもなく指導が行はれなければならぬ。  
妄りに席を離れるな。雑談をすな。少しの事に泣くな。他人の妨害をすな。不潔な處で遊ぶな。等一々口矢鎌しく言つても効果はない。實際に於ては、それもなく注意することゝが肝要である。訓辭のない指導が必要である。

第三なまけるな

1 この頃の兒童は、活動性が旺盛である。本能的に衝動的に一分の間も靜止してゐない併し之等の活動は、凡て利那的感覺的の活動である。刺激のままに活動するものである而してドンナ事でも刺激となる。蟬が鳴き出すと直ぐ飛び出る。樂隊が来るに直ぐ飛び出す。廣告自動車 comes すぐ飛び出す。友達が来る、直ぐ飛び出す云ふ様に、到底一物に對して注意を集注してゐる事が困難である。故になまけるな云ふ事の徹底には、一事一物に對して一生懸命に努力せよといふ事が肝心である。



2 缺席するなと言ふ事も一の注意であるが、此頃の児童は、故なくして缺席するものは殆んどない。此頃の児童は、學校生活を尤も喜んでゐる。此點も昔は心配は多かつたが、教育の方針の徹底の爲めであらう、今は安心なものである。むしろ現在では、彼等の名譽本能を刺激し過ぎて、病氣でありながら、無理をして登校する場所がある。それが原因となつて一命を失ふた例も知つてゐる。それで缺席をすなごいよりもむしろ病氣の場合に對する注意を特に與へてやる事が必要である。

第五 喧嘩をするな

1 喧嘩は、児童本來の本能、衝動的活動である。兄弟が喧嘩をする。友達同志が喧嘩をする。併し夫等の原因なるものは極めて簡單で、而かも根柢が薄弱である。教師はこかく之を合理的に解決しようとする爲め失敗する場所が多い。彼等の本能、衝動を、こかく抑壓しようとする。消滅しようとする。けれども、それは當然ではない。

喧嘩は、昔生活上缺くべからざるものであつた。今日の秩序整然たる社會生活に於ては

昔の表現そのまゝではよくない。之は時代と共に轉移して行かねばならぬことを、結果より味はして表現方法を彼れ等自身に發見すがよい。

2 教育が家庭教育も社會教育もふくむ不良の結果、所謂喧嘩好きのものがある。即ち本能衝動が悪化されたものがある。之等は罪は教育にある。この様に悪化されたものは危険性を帯びてゐる。充分調査して、もしかゝるものを見出しならば、特別の手段を講ぜねばならない。

3 單に喧嘩を抑壓しても効果は尠い事は前に述べたる如くである。社會生活上から感得さす事も必要だし、猶進みては、喧嘩後に於ける精神上的の經驗を味はしめて、その際の不快の感を中心として漸次導入して行く事に努力せねばならぬ。

第九、十 始末をよくせよ。物を粗末に扱ふな

1 児童の破壊本能衝動は、特に著しい。頻りに活動さして、父兄、教師、長上に譴責される場合が尠くない。一日中殆んど破壊活動に追はれてゐるかと思ふ位である。玩具を破



壊す。道具を破壊する。鉛筆の心を取り出す。雑誌を切り抜く。筆の穂をぬく。誠に大人から考へるに、物を粗末に扱ふこと甚しい。併しこの破壊本能は、やがて自己を建設に導いて行く。諸種の破壊物を以て新しき建設をする。創作工夫發見が破壊した時に知り得た材料によつて行はれて行く。彼等の破壊は破壊で終らないで、貴重なる建設に導かれる破壊そのものは不道德ではない。之を不道德と見做して抑壓するにき、折角の建設は、生れて來ない。

2 兒童の活動には、目的や、理想や、將來などの顧慮はない。現實的に、利那的に、感覺的である。現在實現しつゝある活動そのものが目的である。故に整理整頓は、兒童には何等の必要感がない。之が理由としての一面には、自己が手を下さないでも保護せらるゝからではあるが、整理整頓は、彼等に何等の興味を惹かない。却つて苦痛である。故に實行には表はれない。學校から歸ればカバンを投げ出す。毬を使つてしまへば座敷にそのまま置く。缺き雑誌を持ち出すに、一室紙屑だらけにして、缺も切屑もそのままにして置く。

く。着物を着換へるに、そのまま打ちやつて置く。之が兒童の生活である。

3 兒童は殆んど單なる感覺的満足者であり、知覺的満足者である。故に理想に基礎を置いて合理的に夫等の價值を見出すと言ふが如き事はない。

兒童が物を粗末に扱ひ、一方には整理整頓に努力しない所以は、眞にそのものゝ價值を意識せぬからである。眞に價值を知つて來たら自然に鄭重に扱ふ事になる。兒童には、合理的に價值を認める杯は到底望む事は出來ない。けれ共、之は何時までもそのままで置くべきものではない。

「もし之が無かつたら」云ふ經驗を幾度も味得せしめて、本能衝動運動の場合に合理的の價值の葛藤によつて順次その價值を構成せしめる。

整理整頓の導入は比較的容易である。之は家庭、學校、社會即一般環境の模範に注意によつて成功する。態々模範を示すの意味に於て實行する模範は、ワザミらしく、手落ちが出來てその價值が尠い。全生活、それが模範になつてゐなければならぬ。それは本徳目



に限つた事はないが、殊に必要である。

第十八 過をかくすな

1 兒童のあやまちの中には、本能的、衝動的活動なるが故の場合が非常に多い。而して過をかくす場合を考察するときは、幼弱な兒童は、發動的な嘘言よりも、受動的な嘘言を多くつくのである。過に對して叱られる。罰せられる。悪く思はれる。なきに對者の精神より受くる結果を豫想して、恐怖本能衝動によつて、嘘言をつく場合が殆んどである。

對者の權威に畏れない言ふ事は必要だが、權威に不徹底の間に恐怖せしめる事はよくない。常に兒童の自然性を顧慮しないで、單なる權威を以て過失を取扱つてゐるに、兒童に甚しき恐怖を生ぜしめて、過失を重大視し、その結果之を打あけて、之を再びしない言ふ努力が通つて行つてしまふ。只々恐怖から切り抜ける工夫をして、逃走衝動に悪化して行く。

元來兒童は、凡ての事實を告白せんとする天真瀾漫たるものである。然るを、自然性を

無視して訓練して行くときは漸次悪化して、悪事はなるべく之を隠蔽して叱責より逃げようとする。何處までも彼等の自然性を認めて之を純化し淨化して行かねばならない。

2 過をした言ふ事は、大なる悪ではない言ふ事を知らしめると共に、不注意の罪は免れないことを、事實に就て感得せしめる。もしこれをかくす事となるに、不注意の上で虚言を言つた言ふ不良の方面が附け加へられた事となる。かくす位のもは、再びしない言ふ努力が生れない結果、三たび之を爲す事のあるべきを豫定する事が出来る。一度で告白して再びしない事に努力すれば、一の悪ですむものを二つ三つに重なる事となる。遂には善良なる品性の陶冶が出来ない事となる言ふ事を明かにしてやりたい。

要するに、此時代の兒童は、本能的衝動的活動の爲めに起る過が殆んどである。之に對しては、懲罰の意味に於て取扱つてはならぬ。二度三たび、之を繰り返さぬ事に努力せしめる事が第一の仕事であらねばならない。

尋常第四學年 生き物をあはれめ



教 案

一、教材 尋常小學修身書卷四 生き物をあはれめ

一、區分 第一時 間接經驗資料受容

第二時 理想構成資料受容 實踐事項研究

一、目的 一般幼學年に於ては殘虐性が強い。併し此本能は、永久に伸暢せしむべきものではない、彼等の殘虐性をして同情本能に轉化せしめるにある。一方に於ては、自我の成長を計るに共に、本能を醇化せしめる。之を材料的に見るときは、

1 嬢の行爲に感ぜしめる

2 生き物に對する同情心を旺盛にする

一、準備 挿繪の擴大圖

一、順序

■學習心の喚起

1 家庭作業の問題整理發表

2 兒童の經驗發表

3 教師の經驗披瀝人生觀の提唱

4 目的指示

■間接經驗資料の受容

1 生ひたち

2 幼少の時から情深かつたこと

3 負傷した犬をかはいがる

4 整理

■批 判

1 石を投げつけた子供の話との比較



- 2 羊飼と老夫との比較
- 3 僧との比較
- 4 將來の覺悟の發表

■教科書の通讀

◆教授の實際

■學びたい心を起さしめる

1 家庭作業として課しておいた問題答案の整理發表  
 問題||皆さんにも幼かつた時には、こんな行がありましたでせう。その時の事を思ひ出してごらん。

- イ 蟬蝶蜻蛉などの羽をちぎつたり、ぬいたりしたこゝ
- ロ 蛙の皮をむいたり、蛇を殺したりしたこゝ
- ハ かまきり、蜻蛉の腹をちぎつたこゝ

- ニ 雀の巢、その外鳥の巢をこつて、卵をこはしたり、ひなをいぢめたりしたこゝ
- ホ 用もない草や木を折り取つたこゝ
- ヘ 近頃になつても、その様な事があつたか

以上の問題を豫め整理して置いて、彼等の琴線に觸れる様、問答しつゝ發表して行く。此間に於て自己及他人の殘虐性をそれさなく意識せしめる。

2 同情本能の發現の發表をなさしめる

- イ 蟲鳥魚草木を一まごめにすれば何と言ふか
- ロ 生き物を、今言つた様にすることは何といふか。||尋一燕を助けし話に連絡||
- ハ 苦しめる反對は……………

ニ 近頃になつて生き物をかわいがつた事があるか

兒童が最近に於ける生き物に對する同情本能の發現に就て、發表せしめて、人間には、二つの本能のあるこゝ、及自我の成長によつて漸次殘虐本能は失はれ、同情本能が人格の



内容の一部を占める事になる。之が人格の向上である事を味はしめる。

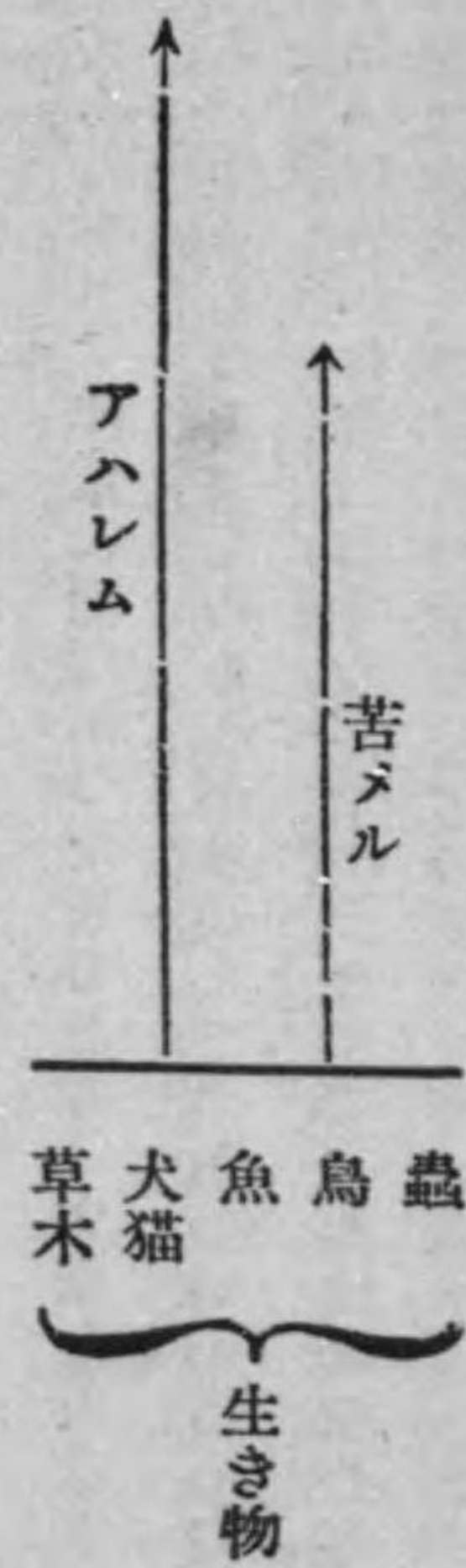
3 教師の経験の披瀝、人生觀の提唱

イ 私も幼い時には、腕白な小僧であつた。今考へて見るに随分ひどい事をした事もある。蛇の尻に紙捲を差し込んで飛ばして喜んだ事がある。ごんほの腹を引き裂いて、中から出て来る腸なごを調べて見たこともある。蛇を見るに石を投げつけて殺した事もある。併し私は、この頃になつては、何の用もない時に生きものを殺したくない様になつて来た。私は長生きをしたいのです。私は三年の間三回大病に罹つた。非常に苦しかった。けれ共、幾ら苦しくても死にたいとは思はなかつた。養生をして一日も早く癒りたいたい薬も飲むし、出来るだけの養生をした。だから私はこの世の中に生きこし生けるものは、すべて長生きがしたいだらうと思ふ様になつて来た。けれども又、生きてゐるよりも、死んだ方が猶更役に立つと思ふ時には、いつでも死にたいと思ふ心もある。その様な考から出来るだけ生きものは、かばつてや

りたいたいと思ふ。

ロ こんな事が、はつきりわかるのが人間の立派な處だと思ふ。人は立派になるに、生き物を苦しめたかつたのが、だん／＼かわいがる様になつて来る。いつ變つて来るかは人によつて違ふ。出来るだけ早く、いぢめる心が減つてかわいがる心が増して来ればよい。

ハ 進行につれ左の事項を板書する。



人には此二つの本能がある。この殘虐本能は同情本能によつて醇化せなければならぬそれが人格の完成への努力であると思ふ事に話を進めて行く。始終右の板書事項を活用す



る。

4 一般的な事を學ぶかを知らしめる

君等も生き物を苦める事が、非常に面白かつた人である。立派な人は早くから生き物をかわいがる心がある。生きものを苦しめる心が多い人、かわいがる心が多い人、ごちらがよからうか。幼い時分から苦しめる心が殆んどなくて、あはれむ心が非常に多い人ならばどうか。

今日は、幼い時から苦しめる心は、すこしもなくて、憫む心が大層深かつた人の話をしよう。

■ 間接経験資料を受け容れしめる

1 生ひたち

それは、ナイチンゲール云ふ女の子である。今から百年程前に、英國に生れた人である。自分の内は、田や畑をたくさん持つてゐて、何にも不自由のない人であつた。

2 幼少の時から情深かつたこと

父も母も大層情深い人で、色々世の中の人々の爲に盡してゐた。其子のナイチンゲールも亦、父母に似て幼い時から情深い娘であつた。

其 實 例

(1) リスを可愛がりしこと

情深い話は幾つもあるが、先づ一つ二つを話さう。

ナイチンゲールの家の後は、晝もなほ暗い位木の茂つた廣い森になつてゐた。

其處には、鼠によく似たリスが澤山住んでゐた。ナイチンゲールは、時々茲へ散歩に出かける。その時には、必ず洋服のポケットへ栗の實や菓子などをに入れて行つて投げてやる。最初はナイチンゲールを見るに直ぐに逃げ出してゐたのが一回一回近寄つて来て、終には、ナイチンゲールの足音を聞くに少しもこわがらないで側へよつて来る。掌へ入れてやつたものでも遠慮なく食べる様になつたこと云ふ事である。



② 老馬を可愛がりしこゝ

又ナイチンゲールの内には、馬を澤山飼つてゐる。其中に老ひた馬が一匹ゐる。この馬は若い時に一生懸命に働いてゐるから、今は庭のあたりを自由に散歩するのが役目である。ナイチンゲールは、森の中のリスさへも可愛がる位だから、自分の内の馬は猶更で、始終大事にしてやつてゐる。それでナイチンゲールの足音を聞くに老馬は、ノコノコやつて来る。そしてナイチンゲールのポケットの中へ口をさし込んで、リンゴやパンの切を喰はへ出して、喜んで食べるこゝろが、おきまりであつたさうである。

③ 犬猫、病人、貧家をあはれみしこゝ

又犬や猫が病氣に罹つたり、傷を受けたりして苦んでゐる時には、薬をやつたり世話をしてやつたりする。又貧乏人の内や病人の内を見舞つてやるのを樂ししてゐた。

3 負傷した犬を介抱せしこゝ

之だけお話ししても、そんなに情深い女の子であつたかと言ふ事が分つたでせう。ナイチ

ンゲールには之以上世界で有名な生き物をあはれんだ話がある。

それはナイチンゲールが九つの時であつた。

或天氣のよい日に、父の友達の前こゝしよに馬にのつて散歩に出掛けた。

そこは廣々とした青い野原で、何千と言ふ羊が飼つてあります(讀本の挿畫觀察)そこはナイチンゲールの内の羊を飼つてある處であつた。

今しも日は西に落ちてゐた。羊飼の爺さんがセツセ羊を小屋の中へ入れてゐる。こんなに澤山の羊だから羊飼の爺さん一人では容易でない。いつも飼ひ訓らした助手の番犬が手傳ふ。

今見るに、いつもまめ／＼しく働いてゐた番犬が見えない。爺さん一人で實に困つてゐた。

僧は不思議に思つて、

「どうしたのか。犬がいないぢやないか」尋ねるに



老爺さんは、眉をひそめて

「ハイ、番犬は、可愛想に腕白な小供に石を投げつけられて片足を挫きました。もう役に立ちますまい。大層傷が痛いので、大變苦んで居ります。餘りかはいさうだから、私はいつその事、一思ひに殺してやつた方がよいかと思ひます」

之を聞いたナイチンゲールは何と思つただらうか。

傷を受けた犬はさう思つてゐるだらうか。一思ひに死んだ方がよいと思つてゐるだらうか。石を投げつけた小供はドンナ心が多いのだらうか。それでよからうか。

僧、

「それは可愛相じや。何處に居るか」聞くに、

「小屋にねてゐます。さうか行つて見て下さ」

二人は小屋の方へ行つた。

此日思はない怪我をした番犬は、俄に馬の足音に驚かされて一生懸命に吠えた。

二人は靜かに小屋の中へ入つた。顔を見るにいつも可愛がつてくれるナイチンゲールであつたから、足の痛さも忘れて、跛をひきつつ立つて行つて、頭を振り尾をしきりに振つた。ナイチンゲールは頭をなでてやつて僧に尋ねた。

「折れてゐますか」

僧は足の傷を調べて

「いや折れてはゐない。大分痛さうだ。誠にかはいさうじや、このまゝ休ませて置いたら近い内になほるだらう」

と立つて行かうとした。ナイチンゲールは、犬の苦んでゐるのを見て、そのまゝ置く氣になれない。一分でも、一時間でも早くこの痛さを取り除いてやりたいと思ひ、僧をよびよめて、

「早く痛むのをのけてやりたいです。その工夫はありませんか」尋ねるに、僧は

「それは、湯のあまりあつくないので温めてやれば、早く痛みもなほり、傷も早く癒はま



せう」  
 ミ言ふに、ナイチンゲールは、早速小屋の隅で湯を沸かして、それで温めて、あみを丁寧に繙帯してやつた。

挿 畫 観 察

翌日も見舞に來て温い湯で温めて新しい繙帯を取り換へてやつた。  
 それから二三日立つてナイチンゲールが牧場に來て見るに、傷が癒つたを見て羊の番に餘念がない。ナイチンゲールの顔を見るに犬は一生懸命に走つて來て、頭を振り尾を振り足にまつはつて御禮を言ふ風をする。

此時羊飼の老爺さんも喜んで、此様子を見て、

「アア若し此犬が、物が言へたらあなたに對して、そんなに御禮を言ふであらう。あなたは、實に此犬の命の親です」

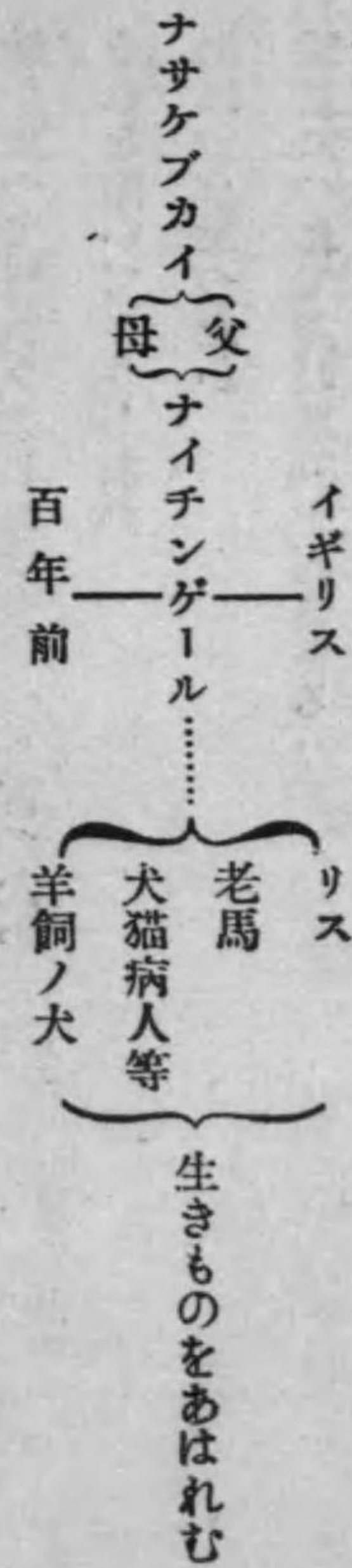
ミ涙を流して禮を言つた。

此犬は、健在で老爺を助け、忠實に働いたミ言ふ事である。  
 ナイチンゲールは、かくして一匹の犬に對しても、實に情深かつた。此心は大きくなつてからは、世界中の人々を助ける心になつて世界の人類を助けた。それは次に習ふ筈である。

■ 説話をまきめて置く Ⅱ 掛圖を使用して Ⅱ

- 1 何故犬は傷を受けたのか
- 2 羊飼ひの老爺さんは、どうしようかと思つたか
- 3 僧は疵を調べてどう言つたか
- 4 僧が立つて行かうとしたとき、どう言つたか
- 5 それを聞いてどうしたか
- 6 傷はさうなつたか
- 7 説話につれて左の事項を板書する





■ 比較して批判せしめる

1 石を投げつけた小供ミナイチンゲールの比較

何れが好きか述べしめる。順次問答法によつて、石をなげつけた小供は殘虐本能のみであつて、之を同情本能に醇化されてゐないこと。ナイチンゲールは之に反對なること。

結局石をなげつけた子供の人格は低劣なること。

2 羊飼の老爺ミナイチンゲールの比較

1 の場合と同様の方法により比較せしむ。老爺は或程度までの同情本能を有してゐたが、未だ徹底したるものは言へなかつた。ナイチンゲールは、この點は徹底的だといへ

る。結局ナイチンゲールが人格價值||同情方面に對して||が高きことを味得せしむ。

3 憎みの比較

前同様の方法により考察せしめる。同情本能の狀に於ては憎も餘り變りは無い様だ。然し表現に於て數等ナイチンゲールの方に譲らねばならぬ。

以上を要するに、人間は殘虐本能から同情本能に早く轉移されたるものが價值多く、且つ品性の陶冶されてゐる價值の大小は敢て年齢によらずして、道徳的生活の多少によることに歸する。

4 將來の覺悟を發表せしめる

本日の説話を聞きて、自己と連結した結果、感じたる點、反省したる點、將來の覺悟を定めし點に就て述べしめる。

5 教科書を讀ましめる

兒童に讀ましめ、解釋の明かならざるものだけ與へて置く。



第六 慾望の發現と理性化

(1) 従來の傾向

従來ストイック學派以來、道德者、宗教家、教育家の内には、慾望の害の方面のみを視て、吾人の生活中に不道德者が醸成される事は、人間に慾望があるからである。第一にこの根源の慾望を壓倒してしまへば、圓滿にして清淨な純眞な理想的の社會が作られるであらう。かゝる考のもことに一意専心慾の撲滅をはかつた。慾望を否定する事が道德であり慾望を否定さす事が、道德教育の全部だに考へて努力した。

故に、金錢を要求したり、財産を望んだり、名譽を要望したりする事は、罪惡として、家庭の一室に蟄居し又は深山に遁入して似而非なる仙人の様な、聖者の様な人間になり切る事を第一とした。

従來は肉的生活、現實的生活を絶対に排斥し、絶対禁慾生活が道德生活の全部にまで誤

解されてしまつた。

けれども、眞剣なる態度に立つものは、禁慾生活には生きる事は出来ないで、大なる焦燥、奮闘、葛藤、戦闘、煩悶、努力を續けた。眞に人間は禁慾生活では成長はない。進展はない。惡事をしない人間は出来るかも知れぬが、働きのある、善事を爲す、活動の出来る人間は生れて來ない。この思想が長續きすればする程、其國は發展が停止される。世界の文化生活に一步も二歩も譲る事なる。或國は儒教の乾物を食つてゐるから、發展が停止したま、笑ふ人があるが、敢て其國だけではない。前者の覆るを見ては、後者の誠こそねばならぬ。今後この思想が永續してゐては、道德教育の改造は到底難かしい。

美衣を欲すること。美食を欲すること。財産を欲すること。地位を欲すること。文化を欲すること。こは一般人間の通性である。之が我々人間活動の基礎的のものである。教育は、その慾望を如何に善導し、統御して行くかが問題である。

現在の慾望中には、そのまゝ發露しては、却つて害を及ぼすものもあり、又低級に過ぐ



るものもあらう。けれども、たゞへ不都合のものあるの故を以て欲望を否定して禁欲生活をなさしめる事によつて、眞に人間が發展する事が出来るかと言ふに、それは反對であつた。大なる不道德者はなくなつたけれど、眞の道德者も現れて來なかつた。

我國が比較的明治維新前まで發展遅々たるものであつた事は、種々の原因があらう。併し、禁欲生活を續けた事も確かにその一原因であらう。禁欲生活を強要する事によつて、人間の眞の發展は停止し、人類文化の發展は中絶する。人間生活に活動を失ひ、人間の乾物が生ずる譯である。今日の如き生存競争の激烈なる活動社會に於ては積極的に大活動の出来る人間を作らねばならぬ。それがためには、益欲望を發現せしめ、之を理性化して行く事によつて、より大なる活動を爲す事に努力せしめねばならぬ。

(2) 欲望の發現

人は、本能衝動生活によつて、適當に満足されて行くならば、それでよい。併し夫は到底全部満足を得る事は出来ない。其全部が満足されない處に人間の發展が生れて來る。

人が本能衝動によつて生活するときは、満足されない場合が生じて來る。この時缺乏の感が生じて來る。之は精神状態が稍進んだ時の事である。幼兒は本能的に衝動的に生活するものであるが、稍精神が發達して來るとき、或不満足に逢遇するときは、之を意識して、或不満足に打勝たんとするに至るものである。之が欲望の發現である。精神の未だ發達しない時は、缺乏の感が生起されずに済むものである。

缺乏の感が起る時は、之を満足せしめよう欲して、その結果種々の目的物を想起する様になる。この欲望には、必ず此目的物の觀念を、之を取り入れたる後の快感を豫想してゐるものである。此二つが伴はないものは欲望ではない。

人の欲望には、二つ以上の目的物が表はれる。この二つ以上の目的物に就ては、各自比較研究して、自己に對して最善のものを採らんとして思慮選擇が行はれる。何れかの一に選擇されたものは動機が生じた譯で、道德上の責任が生じて來たのである。

動機生じて其處に之を實行しようとする動力が生じて來る。決意に基いて、運動を起し



之を實行する事によつて行爲は完成されるのである。

(3) 慾望の分類

直接道德生活に關係が少いが、茲で一二紹介して置かう。之は學者によつて各異つてゐる。必ずしも、一に決定するの必要も見ない。

1 必要の對象から分類したるもの

イ 自然的慾望||生命維持の慾望||

吾々の生命健康を維持する爲めに必要なる慾望で、食慾、運動慾等である。之は必ず満足せしめなければならぬものである。従つて之を抑壓する事は出来ないものである。従來は此中には惡くして排斥されてゐたものが尠くない。

ロ 地位的慾望||社會維持本能の慾望||

地位的慾望とは、吾々が社會生活に於いて、地位、品格を維持する上に是非とも満足されなければならぬもので、財産、名譽等である。地位的慾望は、其社會の生活状態によつ

て種々異なるものである。之は稍もするに、地位的慾望の範圍を越へ、奢侈的慾望に陥り易いものである。

ハ 奢侈的慾望||不必要の慾望||

生命維持の爲めにも、社會上の地位を維持する上にも毫も必要のない慾望である。之等は大に統御せねばならぬものである。

2 發達の順序によつて分類したるもの

イ 生存的慾望

自己保存の爲めに必要なる慾望を指して言ふものであつて、衣服を欲すること。食物を欲すること。住居を欲することは勿論、種族保存の慾望なり社交慾なりは全部この内に含まれるものである。

ロ 文化的慾望

この慾望は、生存的慾望より一般進歩したるものであつて、知識の究明を欲し、道德生



活を爲す事に努力し、藝術に憧憬し、宗教の信仰生活に入らんことを欲して努力する等は、この部に入るべきものであつて、眞、善、美、聖を把握せんことを欲する高尚なるものである。従来前者は主として惡として取扱はれ後者は推賞されてゐた處である。

(4) 慾望は人間活動の根源

前に人間活動の一部を司つてゐるものは、本能衝動である事を述べた。この本能衝動より稍精神の進みたる時は慾望活動が生じて來る事も述べた。この慾望も人間活動の一部の根源となつてゐるものである。

人間が此社會に於て活動してゐる處の根源を考ふる時に、慾望がその預つて力ある事が發見される。

吾々が朝から晩まで身體を勞して活動してゐる事は、自己實現をなさんとして努力してゐるもの——凡ての慾望を満足せしめようとしてゐるに外ならないことを考へられる。

例へば、美衣を欲し、美食を欲し、金錢を欲し、人々交る事を欲する。之れ皆自己保存

慾や、種族保存慾の結果である。地位を欲し、名譽を欲し、道德、藝術、宗教、科學等を欲することなき、之みな生命保存及文化保存の慾望に外ならぬのである。

故に若し凡ての慾望を放棄する事は、自己の滅亡と社會の破滅を希ふものである。それによつて、人間世界は無化し活動は停止されてしまふのである。

吾々は、衣食を欲するが故に活動し、財産を欲するが故に活動してゐるのである。知識を欲し、宗教を欲し、道德を欲し、藝術を欲するが故に活動するのである。

要するに、慾望は個人より見ても、社會より見ても、活動の根本的のものゝ重要なものである。吾々人類が各種の個人生活、社會生活を營んで行くその基底には、必ずこの慾望を見通す事は出來ない。かく慾望は、人間活動の根本的のものである以上、之を尤も旺盛にして、之を適當に統制表現せしめなければならぬ。

(5) 慾望と文化生活

慾望は、人間活動の根源である。それだけ文化生活との關係の厚い事は言ふ迄もない事



である。以下其の關係に就て考察して見る。

野蠻人にあつては慾望は極めて低級で、而かもその數は極めて少い。然るに文明人なるに従つて、慾望は質は高尚なるし、量も非常に多くなつて來る。それで慾望の量と質とによつて文化の極度が知られる。

例は適當ではないが、人間の慾望は停止はして居らぬ。文化の進むにつれ慾望の數の多くなる事も知られる。

慾望發動の順序は違ふが

人力車 人は歩まないで到着する様に苦心する結果、人力車を發明する。

自轉車 之では遅いからなるべく早く到着しよう苦心する。その結果自轉車を發明する。

自動車 自轉車は早いと云ふ事は満足出來るが、一人しか乗れない。一時に多くの人が乗れる様に、而かも自分が苦心しない様に云ふ慾望を満足さす爲めに自動車を發明

する。

汽車 自動車は極めて範圍が狭いのと大輸送は間に合はない。なるべく多數の乗客なり貨物なりの輸送をする爲めに汽車を發明する。

汽船 汽車は陸上だけで海上の輸送は出來ない。海を隔てた處ではこの要求を満足さすものがなければならぬ。このために汽船を發明する。

飛行機 陸上海上だけでは満足出來ない。空中の占領がしたくなる。その結果飛行機を發明する。

こんな事を考へるに、將來如何なるものが發明されるか一寸豫想が付かない。こんなに人間の慾望は停止しない。停止しないから、之を満足する爲めに順次文化の向上がある。市街地の人と田舎に生活してゐる人は慾望が異つてゐる。市街生活の人が田舎生活の人を見るに、交通の上に、飲食の上に、智識獲得の上に、趣味の満足の上に、非常に不便だらうと想像する。然し田舎生活をしてゐるものには左程の感じはない。



もし感じはあつても熱烈ではない。

大都市の人の一日でも停止されては甚しき不満を感じる電車でも水道でも、小都市の生活をしてゐるものには左程の感じもない。

要するに、文明の程度が低ければ低い程、慾望の質も量も、低級で而かも少い。慾望を消滅さす言ふ事は、文明から野蠻に歸れと言ふ事に外ならない。

以上の反面を考へて見ても同様の事が言へよう。人類の慾望が高尙になればなる程、之を満足せしめようとして、科學、藝術、道德、宗教の發達を促して來る。道德的に考ふれば、道德的慾望が増加して高尙になつて來れば、夫等を満足せしむる爲めに、道德的品性が次第に確立される事になつて來る。

以上述べた如く文化の發達と慾望の發達は密接なる相互關係を有してゐる。之を消滅さす事は、文化の發達を停止さす事となる。

道德的には、道德の建設を恐れる事であり、人間性を度外視した空虚な人間の乾物を作

る、低級なる人格者を作る事となる。

(6) 慾望と道德的責任

慾望は、行爲の過程にあるものである。缺乏の感の發生、慾望の表現、思慮の選擇、決意は内面的のものであつて、決行努力は外面的の者である。さて之等の何れの部分に道德的責任が生ずるかと言ふ問題である。之は昔から論争のある處で、内面的の動機を重ずるもの、外面的の結界を重ずるもの二者に分れてゐる。今茲で之を論究する時間を持たぬが、兩面に責任ある事を結論として置く。

只茲で考察すべきは、慾望そのものに責任ありや否と言ふ事である。從來さかく、この慾望は責任あるものとして、道德の批判の對象として善惡を決定してゐたのである。

今之を見るに、缺乏の感は、自然に生ずる衝動である。故に何等の責任のない事は言ふ迄もない。又幾多の慾望は、聯想作用に依つて、自然的結果として生じたものであつて單に思慮選擇の材料たるに過ぎないのである。故に何等道德上の責任はない。たゞ内面



的に責任ありとするも、それは動機となつて始めて責任が生ずるものであつて、夫迄は何等道徳的批判の對象とすべきものではない。

従來之を惡としてゐた事は誤謬だと言ふ事が知られる。金錢を欲する事、財産を欲する事、衣食を欲する事、地位を欲する事、世界の文化を欲する事、何も惡ではない。全くの無道徳性のものである。

もし或行爲の結果が惡であつたとしたならば、それは慾望そのものが惡ではなくて、理性化されなかつた時——方法手段が不正の場合——良心の權威を認めずして、勝手に活動したる場合である。故に何處までも慾望そのものは、惡ではなくて、之を良心化されなかつた統制されなかつた時が惡である。従來この點に考へ及ばないで、單に惡として抑壓に努めた事は誤りである。

(7) 慾望の調和的満足

慾望を表現して、これを満足さすことによつて、個人は伸び文化は進み、人格は完成さ

れる。

併し慾望を表現する事によつて個人の幸福を害し、社會の發達に對して、弊害のあつた場合は、慾望そのものは批判の對象ならぬまでも價値の少いものである。

如何なる慾望も之を自然のままに發現せしめて満足せしめたならば、それでよいとは言へぬ。それは如何にすれば價値あるものとする事が出来るか。それは、

調和的に満足せしむること

永久的に満足せしむること

連帶責任的に満足せしむること

である。人には各種の慾求がある。その内の一つの慾求を満足さす事によつて、夫れ自身に満足と與へるばかりでなしに、その事が外の色々の要求にも相當の満足と與へる様な事となり、全體として調和を得る様満足せしむればよいのである。全體の自我として満足が與へられ、而かも一時的のものでなくして、永久的に満足を求め得べきものでなければな



らなす。

始終人の行がこの調和的満足的に活動が出来て居れば、その人は理想的の人である。常に甲の活動は乙の活動よりも、よく全體の自我を満足せしめて行く様なものを取つて活動して行く様に努力せしめて行かねばならぬ。又一時的の満足であつてはならない。永久的の満足であるべき事も自己的の満足ではなくて、社會的の満足でなければならぬ事も自ら明かである。

(8) 慾望の抑壓と理性化

從來に於ては、禁慾生活を強要して以て道德世界を建設しようとする努力してゐた。それは一場の夢であつた。たゞく枯渴した人間を作り得たに止まつたのである。

從來においては、只孤立したる慾望を満足さす事の缺陷の方面のみを眺めて、慾望は凡て悪なりとして抑壓したのである。けれ共慾望は、前述したる如く、善惡の對象とはならない。吾々人類の個人的、社會的、發動的、根本的であること。道德教育の根本である

事を忘却してはならない。此貴重なる慾望を、その害のみを眺めて、之に恐怖しないで積極的に慾望を陶冶し、善導し、完全なる人格者を作り、社會の生活をして、益圓滿なるものたらしめて行く事が必要である。道德教育の基調として慾望を肯定せねばならない。

若し之を抑壓するならば、本能衝動を抑壓したると同様惡傾向を作る事は變りない。金錢を欲すること、財産を欲すること、飲食を欲すること、其他凡ての慾望は惡でない。方法が善良でなかつた時惡となる。それに拘らず、それ自身を抑壓する事によつて、盗人生じ、自殺者生じ、殺人傷害者生じる。

抑壓によつては、決して道德の進展はない。結局慾望を大に發現せしめ理性化して行かねばならない。

然らば、如何にして理性化するか。こは良心の統制に待つより外ない。良心の支配の元に調和的に満足せしめて行く事である。之に就ては次章に於て述べる事にする。

第七 第一教科書取扱の注意點(拔萃)及教授の實際



Ⅱ 慾望の理性化Ⅱ

第七 食べ物に氣をつけよ

一、慾望は人間の尤も價值ある動力である。肉體的慾望といへども、自己保存の上に價值の大なるものである。只之を調和的に満足せしめない處に缺陷が生じてくる。

それを従來の如く單に慾望を絶對不可として、禁慾生活に努力しようとする事は、よくない事である。之を調和的に満足せしめて行く様取扱ふこゝが肝要である。

一、此時代の慾望は、理性的自覺に訴へて自律的に節制せしめる事は困難である。併し之を單なる他律に立つて器械的に、命令的にやる事はよくない。父母教師からの制限に盲従せしめてはならぬ。若し従はない時はどうなるか。もし參考資料として注意を與へられなかつたならばどうなるか。こゝ、或程度まで彼等を自覺に導いて、幼稚ながらも彼等の理性の上に導いて行くべきである。

二、一方に於ては、單に命令禁止によらず、病氣の時の苦痛や、傳染病流行の際の悲慘や

病菌の恐るべき事を、彼等の知識や感情に訴へて、漸次その慾望を調和的に満足せしめて行く事でなければならぬ。

第十一、十二、十三 親の恩。親を大切にせよ。親の言ひ付を守れ

一、注意すべき點は多々あるが、茲では慾望に關係ある部分だけを拔萃する。

一、往々親の言ひ付けに服従しない、不従順な子供が出来る。

この原因は各種の方面から考察せねばならぬが、第一は、親が我子を理性的に、良心的に、合理的にⅡ之が純粹の意味の絶對の意味の、換言すれば親の考への強賣であるⅡ行動させようとする事が大原因である。自由主義なき大袈裟に言つてゐる父兄もあるが、その實範圍の極めて狭いもので、兒童の慾望の百分の一にも足りないものである。

子供は自然性の生活である。それを直ちに親が考へてゐるだけの到達點に引き上げようとする處に不従順が生れる。親は満足出来ないし子供は苦しむ。親は服従しないと言ふ。

子供は欲求が通らないと言ふ。自然性も甚しい懸隔のある理性も、理性に程遠い自然性の



戦闘が不従順を生む。お互に理屈はある。理屈では自然性の醇化は出来ない。

慾望の理性化は、自然性そのままを發揚さすべきものではない。けれども親が取扱つてゐる様に、自然性甚しい距離のある規矩標準で以て押し賣りするのではない。或點まで子供の慾望を認めてやつて、それに間隔の少い合理觀を提供してやる事である。即漸次良心の啓培を計る事である。兒童の慾望を肯定しながら、この自然性より漸次ぬけ出でしむる事である。

子供は遊びたい。走りたい。破壊したい。買ひたい。持ちたい。食ひたい。着たい。慾望の權化である。満足されなければ不満の感を起す。之を肯定する事は、全然實行さす、満足さす言ふ事ではない。或程度まで満足さすと同時に、一方には、萌芽たる理性を啓培して、順次その光に浴せしむる様指導して行く事である。親の言ひ付を守れ。を取扱ふ際にも之等の呼吸を充分飲み込んで、兒童の經驗を善導して行く事が肝要である。

第十四 兄弟仲よくせよ

一、茲でも慾望と關係ある部分を述べたい。この時代としては、仲々徹底しない教材である。私内には男兒ばかりが四人もゐる。それは朝から晩まで兄弟喧嘩のしつゞけである。勿論講話談判なしに直に解決はつくが、兄は弟を愛し、弟は兄を敬ひなごみ、一度や二度言つた位では眞に彼等を動かす事は出来ない。

一、兄弟喧嘩の原因を考察してゐるに、本能的、衝動的である事、勿論慾望にかられて爲す場合も尠くない。單に教材の下駄の鼻緒をすけかへてやつた位を取扱つた丈では満足出来ない。兒童の經驗を充分に告白せしめて、之を善導して行く事に努力せねばならない。この經驗を取扱ふには、慾望の心理も充分心得て置いて、それ等の餘りに間隔のない理想で以て導いてやるべきである。

密柑一つ分配する位は「何そんな事に」大人は思つてゐるが、子供自身の爲には大問題である。パイゴマを他人が使ふ。「何金屬だから」大人は思つてゐるが、子供の自然性から言へば、容易ならぬ問題である。天下をこられた如く、渾身の力で大争闘が始まる。



此時、之位の事は何だか高飛車に、合理的に、固形化した理想で準繩して行かうとしても何等の共鳴は起つて来ない。之に共鳴せしめてなるほご感ぜしめるには苦心がいる。ただ突發的に氣まぐれであつてはならぬ。自然性の理性化。容易の業ではない。

第十九 うそをいふな

一、嘘言の種類は甚多い。茲では慾望と關係ある分だけ考へる。  
 一、慾望は貴重ではあるが、盲目的であるし一方壓迫が強ければ順次惡化して行く。  
 一、嘘言の中には、この惡化されたる慾望によつて嘘をつくものがある。之は餘程教育上苦心を要するものである。全く窃盜的に行爲にまで行つてゐないでも、悪い意味での自己的動機に基づいてゐる場合は特別な方法によつて取扱はねばならぬ。  
 之等も簡単な例は、兒童生活の上に多くを所有してゐる。之等を告白せしめて充分善導して置かねばならぬ。

尋常第四學年 克巳

教 案

一、教材 尋常小學修身書卷四 克巳

一、區分 第一時 正風幼時の克己の例話受納

第二時 成長後の進展と訓辭

第三時 表現上の解決

一、目的 間接經驗の資料高崎正風の説話を受納することによつて、慾望の調和的満足に努力すべき事を自覺せしむる事を主眼とした。

一、準備 挿畫擴大圖

一、順序

■ 學習動機の喚起

1 兒童の經驗發表

2 目的指示



■ 學習の資料提供

- 1 生ひたち
  - 2 慾望の發見
  - 3 母の參考資料提供
  - 4 正風の煩悶ミ創造
  - 5 謝罪ミ誓詞
  - 6 整理
- 教科書通讀
- 考察解決
- 補充例話提供

◆ 教授の實際

■ 學びたい心を起さしめる

兒童の經驗を發表せしめる。|| 問答による ||

イ おいしさうな物を見て食べて見たいと思つたところあるか。それは如何なるものか。

ロ 友達が美しい着物を着てゐるのを見て着て見たい……

ハ よい玩具を見て、自分もそれを欲しい……

ニ 之は嫌ひだといつて、何ミか言はれたところがあるか……

ホ 今、それを考へるミ、さうだ。

ヘ 犬や猫は嫌ひな事でもするか。

ト 人はさうか。實際の經驗あるか。

チ お金が欲しい。着物が欲しい。知識を得たい。立派なからだになりたい。よい日本人になりたい。之等はいいか悪いか。

以上の問題を前後の連絡をこりつつ、兒童の經驗を發表せしめ、之が解決なさんとする慾望を起さしめる。



■ そんな事を學ぶかを知らしめる。

此様に飲みたい、たべたい、着たい、金持になりたい、勉強したい、よい人になりたい  
たい云ふ様な心持は誰にも持つてゐる。けれども、それには、すん／＼伸ばして  
よいもの、大ていの所で止めなければならぬものがある。今日からは、さ  
うゆう事をハツキリして行きたい。

此時間には、高崎正風といふ人が皆さんと同じ年頃のとき前に話した様な事に出逢  
つてそれをさんなりにして解決したかを學ぼう。

皆さんが今迄考へて居つた事と比較して、如何にするか考へて貰ひたい。

■ 間接經驗資料を受け容れしめる。

1. 生ひたち

高崎正風は、今から十年程前になられた人である。九州の薩摩に言ふ處に生れた。  
父は薩摩の藩主の家來であつた。小さい時から、歌がすきであつた。一を聞けば十を知る

云ふ位伶俐で、大きくなつて、だん／＼よい役に用ひられ、明治天皇や日本の國の爲め  
に働かれた人である。

この様な立派な人にも掛圖提出の幼い時には、まづいものは嫌で、おいしいものが好  
きであつた。

2 食物に對する慾望の發現

或日の事、朝の御飯を下女が運んで來た。正風は之を見た。いつもの御菜よりすつしま  
づいので不快の感を起した。も少しよいお菜がある筈だと思つた。だから「其お菜はまづ  
いから厭だ」云下女に言つた。下女は氣の毒に思つて「それでは取替へませう」云言つて立  
つて行かうとした。

◎ 之はよいであらうか。さうか。君等の考は……………

3 母の參考資料提供

隣の方に居た母親は、之を聞きつけて正風の前に坐つてから言つた。







◎君等は何れを探らうと思ふか。

正風も色々考へた。今おいしいものたべるのはうれしい。しかし大きくなつて、よい武士にならなかつたらいやだ。今おいしいものをたべないでも、がまんできる。先きでよい武士になれない事は、がまんができない。今おいしいものを食べないでも、やはり大きくなつて、よい武士になつた方がよい。

自分はよい武士になりたい。よい武士になりたい。その方がよい。今まづいものをたべする事は、何でもない事だ。今からまづいものを食べる事にならしておいて、先きでよい武士になれるのだから、まづいもの食べる事は何にもつらい事でない。かへつて嬉しい位だかう考へた正風は、矢張りお母さんのおつしやつたこゝがよろしかつたと言ふ事がハッキリわかつて来た。

5 謝罪と誓詞

◎さう分れば、さうするか。

早速お母さんに謝つた。中々免して下さらない。姉も側から謝つて下さつた。正風も、よい武士になつた方がよい事がハッキリ分つて来た事を話して、いつまでもたべものに就て、我まを言はない事を誓つた。

母は與へた参考資料によつて、高級慾望生じて、正風が自ら自分の向ふべき道を創り出した事を涙を流して喜んだ。

正風は漸く夕方御馳走をして貰つて御飯を頂いた。それから正風は、萬事この心持ちで一代を通した人である。

6 整理 掛圖を見つゝ

イ 丸の内の肖像は……

ロ 下のはさうしてゐるのか……

ハ お母さんは何とおつしやつたか。

ニ 正風は始めにさう思つたか。



ホ 終りには……

ヘ 色々考へた後どうきめたのか。

ト 今おいしいものを食べないのは、つらいのか。

チ それでどうしたか。

■ 教科書を読ませる——二回——(本日教授の場所まで)

■ 考察解決——自己の経験を基礎として、本日の資料の受納による問題の考察及解。

イ たまへおいしいものを食べても、よい武士になれるとしたら、初め正風の思つた事はどうであらうか。

茲で慾望の調和的満足を明かにして行く。之によつて人の向上發展のある處も充分領得して行く。

ロ 「お前は武士の子だ」とあるが、それ以外の人にはどうか。

茲で慾望の統御は一般の人に必要な事を會得せしめる。

ハ なぜお膳をしまつてしまつたのか。

茲では、眞の母の愛を想像せしめて、親に對する感恩を味得せしめる。

ニ 何故お母さんが無理だと思へたのか。

慾望が一つであつたからである。故に人は常により高きより大なる慾望を發現せしめて、それ等の戰鬥によつて、より大なるものに満足せしむる事が肝要なる事を了解せしめる。

ホ

何故初の考が、よくなかつたと思ふ事に氣がついたのか。自己は常に修養も淺く、経験も少いから、より高き良心活動を志しむる人の參考資料を得て、之に依つて考究して益自己を向上せしむる事の必要なることを解決せしめる。

ヘ 誰れかが、直に謝る言つたが、それ正風と云ふがよいか。

茲に於て、客觀的善を主觀化する事の必要なる事を味はして、無意味に器械的に謝罪するこの不良なる事を感じしむ。



備考 以上は單に例話の解決に止めず、兒童の經驗を告白せしめて夫等の事項に交渉して、自己の問題として取扱はしむ。

■ 補充例話提供

|| 當校尋常科四學年〇〇生の綴方「我まゝの僕」を読み聞かせ簡單なる批判をなさしめる ||

## 第七章 衷心活動と體現

### 第一 従來の缺陷

従來の道德に對する考察が傳統に客觀に止まつてゐた。何千年も昔のもののみ、それだけが唯一に絶對に貴いものであつて、その風俗、習慣、規矩に従ふ事が道德であることされてゐた。而して何千年來の規矩に、さては標準に、風俗に習慣に叛いたならば、その理由が如何に美しくも、その結果が良好であつたとしても、それは悪だと言はれてゐた。之を異る方面から言へば、自己の行動の標準なるものは、行爲する人自身の内にはなくて、専ら自己以外の多數の人即社會の制裁なるものが唯一の標準であつた。客觀的に多數のものが因襲固定したもので、それを渡してやる事が、準繩を渡してやつた事であり、尺度を渡してやつた事であつた。それが道德教育であり、之を受取つて模倣して行く事が道德行爲であつた。「昔の何某がかゝるよき行爲をした、汝等もよく之を見倣へ。」かゝる事によつ



て教育する者も、教育せらるゝ者も、或一定の鑄型より出でなかつた。又それより出づる事は非常なる悪であつた。單なる傳統から言へば、道德の進歩を認めぬものであり、自我の成長を認めぬものであつた。

私自身の幼少の時代を考へて見るに甚心細い。小學時代に於て、親に孝はかくせよ。君に忠義はかくせよ。儉約はかくせよ。勉強はかくせよ。慈善はかくせよ。道德の型を強迫されて、絶対に之を模倣すべきことを申渡され、家庭訪問があつて、之が其通りの條項に合致してゐない時は相當の懲罰があつた位である。私は相當な理由の許にしかする事が嫌ひだけ共、さうしなければ、成績が下るから、懲罰が恐ろしいから詮方なく、先生の前では、父母の前では、長上の前では、虚偽の道德を行つてゐたのであつた。

之は敢て私許りでなかつた。此事實は最近まで繼續されて來た。吾々は、頗る長い間此没我的生活に慣らされた結果、客觀的な永遠的な或型の存在を肯定する様になつて來た。恰かも自己の生活に對しても、他人との生活關係に於ても、精密に法則的に原型があつて

萬人は之によつて規矩標準として生活すればよいと云ふ事になつてしまつたのである。吾々の生活は、それらの規矩標準より一步も出る事が出來ない。自我の要求は絶対に主張する事が出來ない。たゞその規矩標準に育従してゐる事が道德實現者である。之が極端に走つては、その客觀的の規矩標準を研究する事さへ不道德者の態度とされた。

然るに歐洲戰亂後新思想の勃興から極端に直線的に、この傳統を絶対に排斥し習慣を呪ふ様になつて來た。その結果中には全然同意ならぬ新しい主張も出來てきた。夫等は全部同意ならぬものにして、從來の積弊を矯めると言ふ點には何れも傾聴すべきものであつた。

今後の道德教育は、單に傳統にのみ満足は出來ない。飽くまで自我の要求を満足さす處の道德でなければならぬ。

## 第二 自我の要求



自我の要求とは何であるか。兒童の如く自我の働きの低いものには、禽獸蟲魚と同様に單に本能衝動の働きの場合が多い。目前の事に對して本能衝動の物質的肉的にのみ動かされるものであるけれども、進みたる自我全體の要求は之ばかりでは満足しない。より以上の要求をして来る。之が自我の本質である。如何なる人であつても、白痴瘋癲でないかぎり本能衝動の活動ばかりでは満足しないで、自我の指し示す理想によつて生きて行かうとするものである。

自我は一方には本能衝動的の自然性の要求がある。又一方には、自然肉體の上に生きてゐるばかりでなしに、衷心の要求に生きんとしてゐるものである。されば、自然性に生き猶又衷心に生きる事は出来ない。夫は自然性、理性との間に融合一致する點を見出し、それを實現せん、自我が欲するのである。求めるのである。其欲求に従つて活動する事が善である。その欲求する通り行爲したのが善であり、それを行爲しないのが悪である。

自我がある生活を肯定し、或は否定したとき吾々は、善惡と言ふ價值差別を附するのである。

ある。道德の根據は此處にある。故に道德は自我の要求以外にあるものではなく、自我の要求によつて創造されて行くべきものである。換言するに、自我の要求は、ある生活現象を善なるが故に肯定するものではなく、自我がその道德現象を肯定するが故に善たり得るのである。

善は絶對的のものでない。絶對的善は、行爲の規範として存するものでない。自我自身は絶對價值を有する。故に自我の要求する處の表現は、夫自身絶對なる意味に於て、善である。

以上の如く考察するならば、道德は遵奉すべきものではなく、自我の要求によつて創造すべきものである。自我の外に假に構成されてあるものではなくて、自我の構成すべきものである。

道德は時代の進運と共に、個人の自我の成長と共にその進展を認めて、時々刻々創造向上發展すべきものである。



單なる部分的要求に満足せず、常に自己衷心の要求の上に立つて、客觀的に普遍妥當すべく意識的に服従して、眞の道德的活動が完成し得る様努力する事である。教科書には、飽くまで他人の強迫にも恐怖せず、墮落せず、自己の衷心の要求を飽までも遂行した二宮金次郎の例話や、母の参考資料を得て何處迄も自己の衷心の要求によつて活動した處の高崎正風等の事實話が採擇されてある。此貴重なる材料もこかく從來は他律的に、型の押賣の如く取扱はれ其眞價値は發揮されなかつたのは誠に遺憾事である。

道德教育は、自我を擴充成長せしめ、その要求を愈大ならしめ、その要求に對して忠實なる様努力して行かねばならぬ。

### 第三 行爲と品性

良心の要求の満足は、行爲としての活動である。目的活動として其行爲を離れて人格實現はない。さて道德の對象批判なるものは、行爲の品性である。行爲は、意識的に

活動したる場合を指して言ふのである。此場合自我の命令に従つて、爲したる行爲は善であり之に反したる場合は惡である。品性は無意識的に同様の活動を繰り返して行く場合を指して言ふのである。人間の行爲を断片的に見てゐるけれ共、實は人間としての活動は断片的のものではなく、繼續的に流動發展したものである。故に前後の關係やその繰り返す回数によつてその行爲に責任が生じて來るのである。故に品性も行爲と同様に價値の批判對象となるべきものである。

此行爲及び品性の規矩なるものは、一般的に言へば理性である。プラトリーの言葉で言へばイデーである。普通理念を譯されてゐるものである。此理念は、科學の規範となつては眞となり、道德の規範となつては善となり、藝術の規範となつては美なるものである。理念は哲學的に言へば自我である。之を倫理的に言へば良心である。此良心によつて行爲品性ともに價値批判されるべきものである。

### 第四 善



良必は發達の方面から觀れば、場所により時代により異なる處の道德意識である。發達しつゝある良心であるから、之を絶対のものとして停止固定を圖るならば、道德の進歩はなくなる。沈滞してしまふより外ない。けれ共價值の上から言へば、發達しない前も、その後も、其人に取つては高下はない譯である。即良心の命令によつての活動は全く同一價值である。此點に於ては時空を超越した絶対價值のものである。

善は、此良心の内面的要求を満足させた行爲及品性である。自分の最大要求は意識の根本の統一力たる自我の要求である。此自我の要求を満足さす事が自我の實現であつて人間に於て唯一の善である。自我は凡ての價值の根本であるから、吾々は種々の要求がある。その要求は自我の要求である場合に始めて價值を有する。故に自我の要求に反して行爲をなしたる時は價值の無いものである。即惡である。善惡の判断は自我の要求に従順であつたか否かによるものである。

良心は、價值的に時間空間を超越した又個人を超越した處の理念そのものである。故に

傳統でもなければ習慣でもない。善なる活動は、此良心の發動としての活動である。自己の快樂になるか、利益になるか、又は人の便利になるか言ふものでなく、自我を目的としての行爲が善である。

### 第五 良心の權威

茲に暫く良心の權威に就て考察する。吾々は此良心の權威なるものを飽くまで體驗する者である。或論者は今日道德教育の行詰りを論じて曰く、「今日の道德は、良心と言ふ臟體に立籠つてゐるからだ」と言つて、社會組織の上から道德の生命を解決して行かうとするものがある。併し私は、良心の權威を絶対に信仰してゐるものである。

良心を廣義に解すれば、科學的良心、藝術的良心、道德的良心となる。之を意識の上からは、科學的規範意識、藝術的規範意識、道德的規範意識と稱する事が出来る。之を狹義に解すれば、道德的良心、道德的規範意識である。而して規範意識は先驗我と同一である



が故に、結局良心は自我の問題となる。自我の問題に就ては前に簡単に述べて置いたから茲では省略して、その權威に就て究明して行く。

(1) 外教的説明

權威に就ては、一は外部的に、一は内部的に論議されてゐる。外部的のものには、第一が宗教的の説明である。人類以上の神佛の如き絶対者の命令を傳へるのが人間である。故にその命令には絶対に従はなければならない權威がある。第二は哲學的の説明で良心には、宇宙の本體が現れてゐる。其力の現れが命令であるからその權威に従はねばならぬ。第三は社會的説明で、良心の命令は、國家社會の命令を取り次ぐものである、良心の命令は、國家社會の全部が是認して以て吾人への實行を促すものである。故に權威がある。爲すものである。以上は何れも權威を外部的に置くものである。併し之では眞に權威を認める事は出来ない。

(2) 内部的説明

第一は道德的説明も言ふべきものである。自我には眞我を偽我を有する。偽我は様々の慾に向つて吾々を誘ひ悪事を勧める。眞我は吾人に向つて善を勧める。故に人間は、常に眞我の命令に従はなければならない。此眞我を以て良心の命令と爲すものである。以上の諸説は、完全には言へない。併し何れも一部の眞理が含まれてゐる。而して次第に良心の命令に服従せねばならぬ事を自覺する様になつて來た事は進歩した事であつて、自然に自己の精神の内部に良心を發見する様になつて來たのである。第二は、心理的説明であつて良心そのもの自身に權威がある。爲すもので、此内には幾つかの種類に分れてゐる

イ 知力と爲すもの

良心の命令は知力である。知力は吾々に善惡を教へて善方面を指示するものである。故に此知力が良心である。吾々は何處迄も之に従はねばならない。

ロ 意志と爲すもの

良心は吾人に善事の遂行を爲さしめる。各種の障害に打ち克つて實行を迫る。故に此意



志が權威あるものである。之が良心と言ふべきものである。

ハ 超心理的のものなるもの

知情意以上に良心ありて、吾人に命令を下すものである。故に此權威に絶対に従はばならない。

以上の如く、或は宗教的に、或は哲學的に、或は社會的に、説明された。之は何れも外部的説明に過ぎない。進みては心理的に、又は知情意を超越したるものとして權威を認め、た後者は内部的説明なるが故に、前者に比し一段の進歩である。併し之も完全なる言となす。

### ③ 眞の權威

凡そ人間の活動の動力なるものに三つを擧げる事が出来る。第一は本能活動で、第二は衝動活動で第三は低級なる慾望活動である、なほ尤も低級なるものは反射活動である。之を意識を中心として考へれば、反射活動、本能活動は、無意識的であり、衝動活動、意

志活動は、意識的である。

本能衝動、慾望は人間活動の根源なるものであつて貴重なるものである。併し何れも無理想無制約的のものである。之は經驗我の生活である。

然るに此三者を統整して各々のよろしきを得させるものが必要である。此貴重なる根本動力をして調和よろしきを得せしめ、完全に人格の陶冶を圖る爲めには、之等の動力を調和し、統一し、制御して行くものがなくてはならぬ。

人間の眞の生活を考へて見るに、單に自然的に盲目的にのみ生活して行く事に甘じてゐる事は出来ない。たしかに統一ある活動をして行くものである。即自然性を統一した生活をするものである。

此統一し、制御し、調和するものが良心である。道德的規範意識である。自然活動とは經驗我の活動であり、良心的活動とは先驗我の活動である。今之を例を以て見るに、良心を一國の君主に見れば、三者は人民である。統率者があつて國內は平和に發展して行くの



である。

良心は最高に位して、盲目的な本能、衝動、意欲をよく調和しその本分を守らしむる事が出来る。他の方面から之を見るときは、本能衝動慾望は活動しつゝある機械である。各要部夫々の能力を發揮する。けれ共孤立した活動は却つて他部に障害を及ぼす。眞にその機械としての價値は失はれる。眞に優秀なる機械として、その價値を發揮し能率の増進を圖る爲めには、有機的活動を爲さしめねばならぬ。此機械を調和し統一し制御し支配して行く爲めの熟練なる技師を要する。此技師によつて始めて各部の職分を任務は圓滑に行はれ、よりよき生産創造が出来る。勿論技師は直接の生産者ではない。直接の任務者は機械そのものである。良心は直接の活動者ではない。直接の活動者は、本能衝動慾望である。けれ共技師がなくては、機械は運轉しないと同様に、良心がなくては自然性はよりよき活動をしない。

器械の活動を制御するものは、技師である。人間の活動を制御するものは良心である。

良心の最上權威者に服従せねばならぬ。

以上で良心の權威を略盡したのであるが、猶此處に注意すべきは「欲する處に矩をこえず」である。欲するは經驗我の要求である。矩は先驗我の統一である。即善の規範であり、方向である。此先驗我を經驗我に合致する處之が道德の最上であり極致である。然るに誤つてならない。事は、孔子の謂ふ處の道德の事實は、道德の終局でない。事實は永久に創造されるものである。只之を事實として表現する態度は、自然我を理性我の一致にたる事勿論である。

### 第六善の條件

従來は、絶對の意味に於て道德の型に對して、全部之を模倣した時は善となり、之を自己の考によつて活動し、全部を模倣しなかつた時に惡なるのであつた。けれ共、それは余りに客觀的であるし器械的であつた。かゝる結果創造は生れないし、従つて道德の進歩



は認められなかつた。

今後の道徳に於ては、良心の存在に權威を認識し、その命令に服従して活動した時に善となり、之に背いて活動した時に悪なるべきである。従来は外部的であるし客觀本位であつたが、今後は内部的に、主觀本位に活動せなければならぬ。故に今後は社會の制裁に恐れて實行した言ふのでは理由にならない。眞の道徳活動ではない。何だか知らぬが社會の人が多數實行してゐるから行ふた云ふのでは、眞の道徳的行爲ではない。

反對に、たゞ社會的規範でも、國家的法律でも、自己の良心を通して、それが満足したるものに從ふて活動したならば、善である。合理的善である。之に反したとき社會的規範であつても、國家的法律であつても、それが自己の良心の問題として満足したる時に於ては前者と同様合理的善である。

茲に一考すべきものがある。それは、たゞ良心の命令によつて活動すれば善である云ふその中には、次の事を豫想して決定して行かねばならぬ。それは、

◎ 永久的であつて、一時的であつてはならぬ。

◎ 社會的のものであつて、個人的であつてはならぬ。

◎ 全我を満足さすべきものであつて、部分我の満足のものであつてはならぬ。

これが條件となつてゐる、衷心の叫びに從つて行かねばならぬ。たゞ刹那々の心の趣くがまゝに活動して行くことは、良心だの假名に外ならない。眞の良心は、永久的であり、社會的であり、全我的であるからである。單に良心てふものを直覺的に、偏狹的に解しては却つて危険性を帯びて來る。永久的であり、社會的であり、全我的である以上、普汎に相容れないものではない。而かも特殊を離れない。客觀に相争ふものではない。而かも主觀に基いてゐる。理想に立つが自然を基調とする。絶對を主張するが相對に即したものである。

自己を満足さすと同時に他人を満足さすものであり、今日の満足は明日の満足の前提となるものであり、統一ある生命の部分我の満足はまた全我の満足であるべきこと言ふまで



もない。

かくの如き良心の命令に従つて自己が満足したものであれば善である。之が倫理學の上に幾分かの難點があるにしても、私は修身教育に當るものの信仰を茲に置く事が今の處尤も便宜だと思つてゐる。

だから妥當性を帯びてゐる良心の命令に従ふて行爲したならば善であり、之に反した行爲は惡である。道徳的客觀の規矩のみにそむいて始めて惡なるべきものではなく、道徳的客觀の規矩を抱擁してゐる處の良心の命令にそむいた時である。法律、規則等の何れにしても同様である。

### 第七 客觀的善の主觀化

人は良心の命令によつて活動する事が善である。その良心は淺薄なものであつてはならぬ事に到達した。

茲で實際問題に就て考察して見た。良心の命令と言ふのだからして、それは他人ではなくして自己の問題である。先づ起るものは自己の良心は、しかく、價値の大なるものであるか否、殊に小學校兒童の良心は、茲に要求してゐる様な大なる成長をなしてゐるものか否、之に就ては既に自我の處で大要述べたから茲では省略する。

たゞへ兒童の良心は顯微鏡的のものであるにしても、之を他所にする事は出來ない。その良心は培ひ守り立てられる事によつて、益その偉大さを發揮する。内外相應する事に依つて獨自性を發揮する。偉大なる力を有してゐても之を認めないで努力する處に大なる伸暢性は阻害される。いぢけた、曲つた盆栽的人間が出来る。

そこで、その貧弱さ淺薄さを自覺する時に、自己はより以上に良心の啓培を計る事に努力する。而して自ら完成を圖つて行く。この完成を圖るために材料を要する。

追求的善に努力するものは、到底主觀のみでは満足が出來ない。智能の發達したる人、經驗の豊富なる人、偉大なる自我を實現されたる人を隅から隅まで、捜し求めて研究をす



る。道德人は自我の調和的満足、永久的満足、社會的満足の實現者である限り、普汎的である。之を吸収して血となり肉となす事である。けれども、それそのままでは滋養はならぬ。本質は主観にある。他律的の受容では生命はならぬ。自律的に、自己の肯定したるもの、そのみが、自己の上に新しき自己が建設融合されて行く。他人の善を受容する事は、之に盲従する事でない。又修身教育から言へば盲従さすものではない。リツプスの所謂服従さすものである。主観に服従さすものである。自己の良心に服従の爲めの参考資料である。

### 第八 主観化と研究態度

客観的善の主観化は、従來の如く客観的善に盲従する事ではない。自己を他處にして、他人の決定したる善を、そのまま認容して、之を何處までも模倣して、而して自己の完成

を計らうとする事ではない。古來の聖賢の教訓や、先覺者父母教師長上の指教を仰ぐものは、自己の良心を啓培し、より高くより深くする爲めである。故に研究の結果、全部を受容する事もあるし、又一部のみに止める事もあるし、時によれば全然認めない事もあり得るのである。

單に客観に盲従する時は「なぜ」云ふ如き態度は絶対に免されない。時々場合々、主観の如何に拘らないで無條件的に全部を肯定せねばならない。さうなる時々強迫に恐怖して認容せねばならないから、熱烈なる所がなく眞摯なる所がなく、實行力も伴はない。然るに、自我によつて客観的善を研究する以上、先づ「なぜ」云ふ考へが眞先に出来て研究を始める。其上で認容排斥、肯定否定が行はれる。而してそこに信念が生ずる。肯定したものには萬難を排して實行せんとする努力が生ずる。かの二宮金次郎が叔父萬兵衛の指示された理想を研究態度で以て之を研究し、叔父の理想を全然排斥し、自己の立てたる理想を飽くまで遂行に努力した。その熱烈であつたこゝ眞摯であつたこゝは、吾人の



大に學ばねばならぬ處ではあるまいか。

兒童をして常にかゝる態度によつて自己を深くせしめねばならぬ。之は到底一時的に出來得るものではない。且つ淺薄なる方案のもみに實行するときは、却つて兒童を損ふ。之が實行には渾心の注意を要する。

今後の修身教育は、兒童の衷心的態度に立たしめて行かねばならない。兒童の良心を無視して、他律的に道德の型を強要してはならない。併し之に反對に兒童の生活そのまゝに放任しては、彼等の良心の啓培の參考資料をも與へない事となる。之は甚だしい誤言はねばならぬ。

兒童は先驗的に偉大なる伸暢性を有してゐる。之が擴充伸展は先人の文化財に待たねばならぬ。進みてはより以上の道德文化を創造せねばならぬ。併して道德文化の受容は、主觀即兒童の良心が中心とならねばならぬ。而して自己の服従する規範を作るのである。客觀的善を主觀化して常に良心の成長擴充を基調として努力せしめねばならぬ。

### 第九 教科書取扱ひの注意點(拔萃)及教授の實際

||衷心活動態度||

高學年になつて來れば、この態度によつて殆んどの學習が行はれて行く。併し低學年から之が訓練に努力せなければならぬ。茲では主として低學年の方を拔萃する||之は初歩たる事は勿論である||

#### 第一、第二 時刻を守れ

一、兒童は、就床、起床に就ては、長い間家庭で慣らされてゐる、それを「何時に寝て何時に起きよ」などの事まで定めて實行さそうとする事はよくない。

彼等が境遇の異りたる學校社會に入りたる以上は、時間的に順應せなければならぬ必要を、漠然と味はして置けば、あまは彼等の態度に任して置いた方が却つて實行の上に効果が多い。

一、極端なる獎勵は、却つて弊を生ずる。殊に恐怖に訴へたりして實行を迫る事は尙更よ



くない。朝寝したとき、遅刻したとき、集合に遅れた時、食事に遅れたとき、各自その不利益を他人に迷惑を掛けたる事柄が臍ろけながらも分つて来る。自ら時刻を守らねばならぬ。云ふ叫びは出来て来る。彼等を刺激するにしても、その事實の善悪を評するよりも、彼等の良心の芽生えを刺激してやる事が肝心である。

第一、第八 行儀よくせよ。

一、社會的生活をなす以上社會の習慣に従つて、相當の禮儀作法を心得て、之を實行せねばならぬ事は論ずるまでもない。然るに之が取扱ひが兎角、他律的に解して、その態度で行き易い。その結果、永久に客觀視し他律視し、自己を無にしようとする傾がある。行儀作法に固定があるのではない。各自の主觀に立つて固定した方が便宜であるから一定されてゐるだけである。主觀に立つて變へて行つた方がよいものは、随分變更して行くべきものである。又事實に於て時代と共に變遷されつゝあるのである。

然し兒童は未だ改革の任に當べきものではない。今は單なる實行者であればよい。けれども

それは永久の單なる實行者ではない、來るべき時代の開拓者である。今からその萌芽を殺したくない。それを殺して置いては、改革時代が來ても固形化してゐて開拓が出来ない。尋常一年は一年だけに自覺さすべきである。勿論茲で自覺せしむる。云ふ事は、禮儀作法の眞髓の愛敬の念を喚び起す事ではない。なぜ社會的生活には相當の禮儀作法に従つて行つた方がよいか。云ふ方面を明かにして行きたい。之は自己自身より考へて行かせるも自ら明かすなつて來るものである。

一、前に述べた様に、道德の本質に立つて自覺的に禮儀作法を自覺する事は出来ない。先づ形式より入れて裏心に觸れしめて行く。之は方便的に見なければならぬが、それが順序である。故に餘り理屈を言ふよりも訓練する事が大切である。只注意すべき事は、將來までも形式が先きに立つて行爲をする人間を作つてはならぬ。自律の爲めの他律である事に努力せなければならぬ。

第一、第十一、第十二、第十三 親の恩。親を大切にせよ。親の言ひ



付を守れ、

一、本教材は、合理的、理性的、ものである。純粹良心の上に立つた材料である。主観本位から言へば、理性的教材の様ではあるが、児童の心理からいつては却つて不適當かも知れない。材料は今少し自然性的のものがよい。之を取扱ふには、この材料を以て、理屈的に説いては効果は失はれる。アツサリミ説く方がよい。そして教師の實感を話すなり、又他の例を以て之を生かす事がよい。そして不知不識の間に、彼等の良心に覺醒を與へて行きたい。尋一などは、主観本位に扱ふ言つたきて、之を眞向から振りかざすものではない。主観へ主観へミ、いつの間にか導いて行く事であればならぬ。眞に親の思なきは親が死んで見ぬ内には理屈が分つてゐても實感の強烈なるものは浮んで來ない。教師に強い實感や、児童の内に實感を持つてゐるものがあれば教師も話したり、児童にも話さしたりする方がよろしい。

一、親の恩を感得させ、親を大切にせなければならぬ、親の言ひ付を守らねばならぬ言

ふ事を、たゞ眞正面から進めて行つても、容易に響くものではない。けれ共、遠くより不知不識の間に引き入れられたものは、よしその時、明確に反應がなかつたとしても、いつかの時機には、異つた形で強い力で現れて來るものである。殊に親子の關係は、血ミ肉ミ而かも靈のつながりである以上、幾ら遠廻しに行つても、ヒシ／＼と泌み込んで行くものである。孝道などは餘り理屈よりも遠廻しに、事實からして彼等の主観の芽生へを培つて行くのがよゝ。

尋一、 過をかくすな。

一、此教材は児童の經驗界の茶飯事である。而し中には過をしてかくしたのもある。中には朋友、父兄、教師等に強ひられて斷りに行つた事もある。中には詮議された結果詮方なく白狀した實例も持つてゐる。

寅吉は自分の過を自ら認識し、自ら批判し、自らその處置を圖つたものである。この態度は、児童にも充分了解させて、この態度を以て凡ての道德的行爲をなすべき事を勸奨す



る。之は、過をかくすなま云ふ徳目を明かにしてやると同時に、修養態度を暗示してやるべきものである。之なきも理屈は全部ぬきにして問答によつて、それなく味はす事が大切である。

一、本教材に殆んど同じ注意を要するものは、第二十。自分のものゝ人のものにある、清吉が拾つた鉛筆を返せし態度。及二十二。おもひやりの處の小三郎が盲の道案内をせし態度等は主観態度として賞揚し、それなくその態度の傾向を作つて置く。

尋常第六學年 獨を慣め

教 案

一、教材 尋常小學修身書卷六 獨を慣め

一、區分 第一時、訓辭。人の賞讃叱責を行爲、良心を行爲。獨を慣むべきこと

第二時、訓辭。内心上自己を欺くこと、公德との關係、日本道德の缺陷

例活

一、本次目的

幼兒に於ては、他律的に、賞讃態度によつて、順應して行爲を爲してゐるが、漸次良心の萌芽が表はるゝに従つて、自律的に行爲なすべき事を知らしむ。他律的習慣の結果獨りを慎むこと容易でないけれ共漸次、此方面に注意して人格の完成を計るべき事を感知せしめる。

一、準備小黑板

一、順序

學習心の喚起

1、吾人の本務如何

2、經驗發表

3 目的指示

■ 經驗獲得(問題提出、考察解釋)



- 1、賞讃態度を行為、
  - 2、人を対象としたる時の行為の難易
  - 3、良心の所在
  - 4、良心の比較
  - 5、良心の發達
  - 6、良心の價值
  - 7、他律と自律
  - 8、獨りを慎むこと
- 整理
- 自己創造
- 1、所感發表
  - 2、經驗發表

◆ 教授の實際

- 學習心を起す
- 人間の本務を述べしめる、
- イ、人間はこの世の中へ生れて來るに同時に此責任を負はねばならぬ様組織立てられてゐる。
- ロ、如何なる本務があるか。
- ハ、國家に對しては。社會に對しては。家庭に對しては、自己に對しては、
- ニ、之等の務を充分にするには、何を相手に行かねばならぬかを共に研究して行かう。
- ホ、一體吾々の小さい時の事を考へるに、人が賞めて呉れる事は出來易かつたか否。
- ヘ、人に嫌はれる様なことは……………。人に叱られる様な事は……………。
- ト、現在でもその様な事があるか。その氣分は如何。
- チ、之でよからうか……………。



之から研究して行かう。

■ 経験獲得(問題提出。考察と解決)

1、賞讃態度と行爲

◎人が見てゐるときには、善い事が多いか尠いか。……………悪い事は……………

之は兒童が、自己の経験を回顧すれば、一目瞭然たるものであるから、直に、人の見てゐるとき、又は、人の聞いてゐるときは、善事多く、その反対は少き事を答へる

◎夫は如何なる理由に基くか。

人の見てゐる時、善事をするときは、人はどう言ふか。人の……………、悪事をするときは、……………

善事は人之を賞讃し、悪事は之を嫌忌する答へを得る、之によつて人の見聞せる所にて善事を爲し悪事の尠きは、人を相手にして、人の賞讃態度によつて道德的行爲をせるものなる事を發表せしめる。

左記兒童作品を朗讀し判断せしめる。

■ 机のふたをあけて。

尋四 □ □ □ □

修身の時間に先生が教室へおはいりになつた。禮がすむと「皆さん机のふたをあけて」こおつしやつた。私は先生が、おまはりになるのか知らんこ、むねがドキ／＼した、一同はガタ／＼こふたをあけた。机の中を見るこ、右の方に算術の本が開いたまゝある。左の方に雑記帳がらんざつにおかれてある。はんかちが汗をふいたまゝおし込まれてある。隅の方には、鉛筆の削り屑がたくさんちらばつてゐる。小學ボールも押し込んである。

先生はたいい見ておまはりになるのだ。今日はしかられるであらうこ思つてソツト先生の知らぬ間になほした。先生は○○さんの處までおいでになつて、この原稿紙をあけますから「机のふたをあけて」こ云ふ題でお書きなさいこおつしやつた。ヤツト安心して之を書いた。



◎之は誰を相手にしてゐる兒童の書いたものだと思ふか。之でよからうか。  
兒童は、先生即人を相手にしてゐる人の行ひで、賞讃態度に立つてゐるものなる事の判断がつく。勿論之では満足出来ないと思へる。  
左の事項は進行につれて板書して行く。



兒童經驗發表

◎幼ない時はよくある事であるが、人を見てゐない時には、少し位の悪い事は出来易いが君等にもその様な經驗があるか發表して見よ。  
兒童は學習態度さへ訓練されてゐるならば、經驗をドシ／＼告白する、教師は他の兒童

と共に之を聞き概括する。凡て人を相手にしてゐる結果なる事を發見せしめる。  
教師の經驗發表

イ、三年生の時掃除當番があつた。塵をこる際塵取の先が壊れてゐて充分きれない。邪魔臭くなつて、残りのものだけ隅の方へはき込んだ事がある。今考へて見るに少しの面倒も簡略にしたいものであると思ふ。そして先生が見ておれば逆も出来なかつたであらうと思ふ。

ロ、私は學校に行つてからオルガンが弾きたくてたまらない。先生に言つても許して呉れない。さう／＼或朝一時間程早く行つて之を弾いた。小使が知つて先生に話した。それからさめられた。

みんなに人が知らないと思つても、さうせいつかは分つて来るものだと思つた。見てゐないと思つても悪い事は出来ない。その時の考へも矢張り人を相手にした考へ方であつた。自分の心が自分を責めたものではなかつた。



2、人を対象としたる時の行爲の難易。

◎人が見てゐる時に見てゐない時と、何れが悪をしやすいか。……何れが悪をしにくい。前の問答によつて、實行上の難易は略明かになつてゐる。又自己の經驗を回顧しても了解が出来る。人が見聞する時は、悪はし難くて、見てゐない時には悪はし易い。答へを得る。

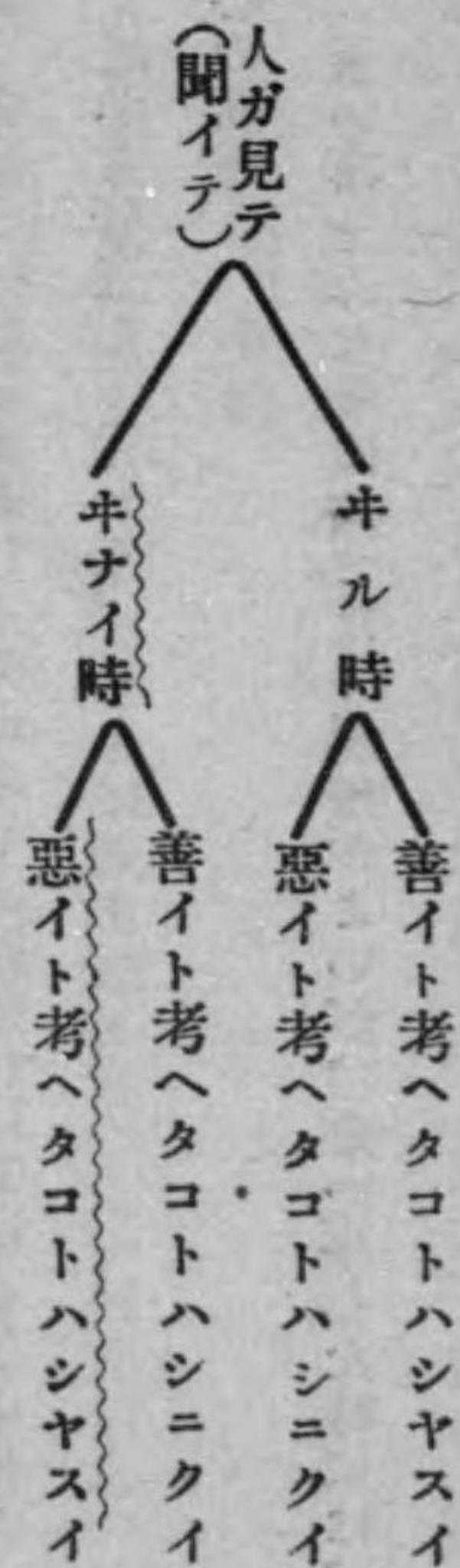
◎人が見聞してゐる時に見聞してゐない時とは何れが、善をし易いか。しにくい。之等も答は容易である。人の見聞せる際は、善行爲し易く、その反對に善はし難い。

■兒童の經驗を發表せしめる。前同様の取扱をする。

■批判せしめる。

あの生垣には所々抜け穴の様なのがあいてゐる。あれはごうしたのだらう。犬か猫か。若し兒童の中にあつたら、それはいつ行はれた事だらうか。果してそれが分らずにおるだらうか。良行爲か。

左の事項を進行につれて板書して行く。



3、結論と考察

◎今迄の事を約めて見ればどうなるか。

人の見てゐる時には、善事はし易くして悪事はしがたい。故に善事が多くなり悪事は少くなる。人のゐない時はその反對である。

◎吾等が本務を遂行する上には、人がゐる方がよいかゐない方がよいか。ゐる方が便宜だ云ふ事は直に答へられる。

人が始終ついてゐて呉れば、善を勧めて呉れ悪は矯めてくれる。善は讃めて呉れ悪は叱



られる。従つて悪は少くなり善事の遂行が出来る。之も悪い修養法ではない。幼い時は大抵この修養法によるべきものである。

◎けれ共吾々の生活の常住坐臥、自己の行動と共にして呉れる人は無い。獨り行動せなければならぬ場合がある。夫等の場合に人がゐなければ自然にさうなり行くか。

善事は少くなり悪事が多くなり、遂に本務の遂行が困難になるものである。

◎人を頼りにするに云ふ事は一の修養法ではあるが、それ程頼りになるものかさうか。

◎常住坐臥、吾等三行動を共にして呉れるものがあれば甚都合がよい。その様なものがあらうか。之から研究して行かう。

4、良心の所在

◎人間は、善い事をした後は何もなく氣持がよいが、悪い事した時には、ぎんな氣持になるか。

先程誰れか、人のゐない時に悪い事をしたといふ事を言つたが、その後も心持に何等の

變りは無かつたか。

何だか心持が悪く、自分を責める様な胸苦しい思ひがする。之も兒童は經驗を有してゐる。

■説明、考察

之を一般に氣を咎めると言つてゐる。之は誰も見てゐないのだから、人が責る筈はないが、自分の心が自分を責める、他人が見て居つて、他人が自分を責るに同様に自分が自分をビシビシ責める。ひさいのになるに遂に堪へられないで自殺するものもある。

◎そんな時には、さうすればよいか。

■事實の考察

之は二三日あきの新聞である。徳島縣の出來事であるが題はかう書いてある。「十年前の賊の自首」がある。所も名前もあるが省いて置く。讀んで見るから、之を考へて見よ。

|| 全文の記載省略 ||



要項

- 1、公文書を偽造し數千圓を横領せしこと。
- 2、その後東京大阪にて事業に従事せしこと。
- 3、警察にては苦心せしが容易に發見せざりしこと。
- 4、良心の責苦に堪えかね遂に十年目に自首せしこと。

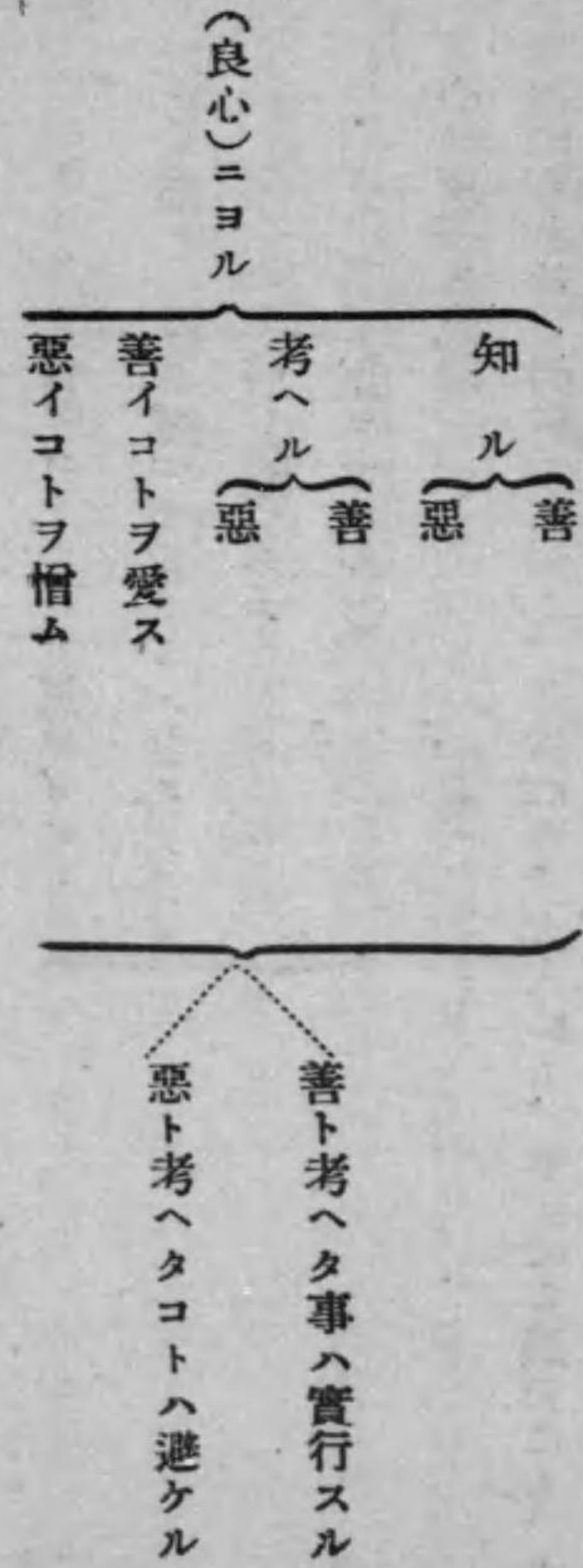
■ 兒童の經驗を發表せしめる。

之にて名前はともかくも、吾人を責めるものがある事は明かになつて來る。

■ 說 明

此外に、之の兄弟分に色々のものがある。

- 一、人の道に對して善徳を知つてゐる。
- 二、何事かに出逢つたとき。何れにするかき決める力。
- 三、善い事をする事を喜び、悪い事をする事を憎む。



- 四、或事をなしたる後責めたり吐つたりする心持。
  - 五、善事は實行し惡事は避ける力。
- ◎之には名稱が附せられてある。何と言ふか。||良心||  
六年になれば良心の名稱は聞かされてゐる。  
今迄に修身の教科書中にも、この事が載せられてあつたが何か。||誠||  
左の事項は進行につれて板書する。



善イコトスレバ氣持ガヨイ  
 惡イコトヲスレバ氣持ガ惡イ  
 善ヲ實行スル  
 惡ヲサケル

5、良心の萌芽と發達

此心は誰にもある。男にも女にも、子供にも、大人にも、學生にも農夫にも、之が無い人は無い。

◎君等にもあると思へるか。

さうかこの良心は、どんな人にもあるが、その成長は皆同一ではない。人々によつて各異つてゐる。君等同志でも違ふ。私の心も同一ではない。然し一概に言へば赤坊のは小さい。何萬倍の顕微鏡で見ねばならない程であるかも知れない。君等のは一握り位あるかも知れない。之は修養が積めば積む程大きくなる。大きければ大きい程よい行が出来出来る。

る。之を大きくして行くのが修養である。それで年のこつてゐる人でも修養しない人は良心が小さい。良心が小さい人程人として価値が少い。顕微鏡でも見ぬ様な小さいものでも、段々修養する事によつて大きくして行く事が出来る。

6、良心の價值

◎良心の價值はどこにあるか。

良心は善惡を知つてゐるし、善をすゝめ惡を憎む。善を實行さし、惡を避けさす。誠によい道案内者である。而かも始終離れずについて居つて呉れる。それで此良心を立派に磨きあけて置けば安全である事に結論せしめる。

7、他律と自律

良心は始終吾人に附添ひて、人が居るに否に拘らず、善を考へた事は遂行し、惡を考



へた事は之を避けるものである。自分の良心によつて自分を進めて行くのである。之は一番よい方法である。

かうなれば凡ての本務は立派に行へて行く事が出来るのである。

人を相手にしてゐる善が充分實行されない時も出来るし不都合を來すことになる。

8、獨りを慎むべきこと。

處が矢張り人のゐる時には善事はし易いのである。から特に氣をつけなければならぬのはこれか。良心を相手にしてゐる人でも始終氣をつけてゐなければならぬのは人のゐない時である。人の居ない時にも人のゐる時と同様に注意して行く事である。

人のゐるゐないに拘らず、善い行が出来るのを獨りを慎むと言つたのである。特に氣を注げなければならぬから研究した譯である。

■ 整理

1、小さい子供が、よい事をするのは、人にさうして貰ふ爲か。

- 2、悪い事しないのは、人にさうせられるのが厭だからか。
- 3、此様な事を目當てにして、行をするばかりでよいだらうか。
- 4、然らば誰を相手にするか。
- 5、良心は誰れのも立派か。
- 6、立派でなければ、さうするか。
- 7、良心を相手にする行は、人のゐるゐないによつて變りがあるか。
- 8、人の見聞するに否に依つて、行ひを二つにしないのを何と言ふか。

1、經驗發表

2、所感發表



## 第八章 善の創造活動と體現

### 第一 道德の起源と進歩

人類の原始的な生活に於いては、道德を見るべきものは殆んど無い。生活全體を支配してゐたものは、本能衝動意欲であつた。之は生理的に自然性の満足をさす爲であつた。然るに漸次共同生活を繼續する事によつて、單に自然生活は他人に害を及ぼすと共に、自己の生活が不安定である事を自覺する。その機會毎に、不知不識の間に他人に迷惑を及ぼす事を知る。たゞへ本能衝動的な要求があるにしても自然之を統御し、之が度重なるに従ひ之を繰返さるゝ事によつて習慣が構成される様になる。習慣となれば不知不識の間にこの習慣に従つて生活する。

第一は 道德の標準が自己の自然性である。それが進みて第二は、社會が構成されてゐる風俗習慣が標準となる。第三は社會が進むに風俗習慣に對して盲従するものでなく之に對して疑問を起し考察を試む事となり、やがて風俗習慣に對する原理を把握して、その原理を活用し、自己の衷心によつて活動する。之が道德進展の過程である。

今日の我國の社會が、習慣道德より進んで原理原則によつて自律的に活動せんとする方面の範圍が擴大して來た事は、道德の進歩を意味するものである。

更に個人の上から之を觀れば、客觀的に、風俗習慣によつて自己を律してゐたものが、次第に自己の立てたる理想によつて之を實現せんとする様になつて來たことは、——たゞその實現が一部の人であるにしても——道德の進歩である。

然るに從來は、道德の理想なるものが、固定的に窮極的に存在してゐるものにして、始終努力を繼續してゐた。素より人は、普汎的の、既成的の、固定的の理想により訓練され、陶冶され、完成される。けれ共、その資料によつて普汎的實現を爲すだけでは満足が出来ない。より以上の理想を創造して普遍へ供給する。その普遍は、既成的の固定的のものに比すれば、一段進歩したものである。



かく人は、道徳的に普汎を取り入れて、進みたる特殊に立ち、進みたる特殊を提供して進みたる普汎をつくるものである。

## 第二 精神生活と理想

精神生活の三形式四實質の質及量は各自によつて同一でない。而して順次各方面が、學習によつて擴充進展して行くべきは言ふまでもない。

道徳的理想なるものは精神生活の一方面である。人が道徳的理想を抱く言ふ事は、それを抱いてゐる人の精神生活である。往々自己を他所にして普汎的理想がある様考へられてゐるが、それは概念的であつて眞に個人の滋養となるべきものではない。その人の滋養となるものは、その人の精神に宿つてゐる理想でなくてはならぬ。併し之は前にも述べた如く個人を通して抽象すれば普汎性妥當性を缺いたものではない。故に各自の把握してゐる理想は特殊に立つた普遍である。具體に立つた抽象である。各人の理想は特殊的普遍

性のものである。實質的には百人が百人ながら異つてゐるであらう。然し形式的には、百人が百人ながら統一原理を持つものである。

かく人の理想は、各個人の上に建設されてゐるもので、個人の精神生活の一部である以上精神と理想とは離れる事の出来ない關係がある譯である。人の精神の程度を突破して理想のみが高級となる事が出来ないと共に、精神の向上してゐるに特に理想だけが低い云ふ事は出来なす。

統一的に、完全的に、圓滿的に精神生活が向上すれば、従つて道徳的理想も進展して行く。まさに精神と理想とは正比例すると言つてよい。而して精神は成長するものである。時々刻々新しき部分を追加して、よりよきものに構成されて行く。苟くも人間が化石せざる限り、昨日の理想よりも今日はより高くなつてゐる。今年の理想よりも明年の理想はより深くなる譯である。故に精神生活を深めずして高めずして、單に高き深き理想を根絶しようとする事は、それは空を握る事である。概念を握る事であつて何等の滋味はなら



なり。

人間と言ふ抽象の上に立つ理想は、矢張り概念的のものであつて同一である。人の上に同一であるばかりでなく、時間の上にも同一であり得る。それは學びとしての場合のみである。従來は之を直に各個人の理想として把握さそうに考へた。けれ共精神が各個人によつて異なる如く理想も異つてゐるものであり、又、それ等の理想は精神の進むに共に高くなる事も事實である。

### 第三 善の創造

道徳的理想は固定的のものでない。理想を抱く人の經驗によつて次第に擴充されて行くものである。道徳人は時々刻々より高き理想を創り出し、之を實現して行く人である。それによつて前に述べたる如く、個人の特種生活は進化し社會の普汎生活は向上して行く。茲で、今少し善の創造に就て考察しよう。吾人は普汎を吸収してより新しきより高き自

己を建設する。各種の參考資料によつて、自己の衷心から理想を創造して行く。

吾人は自己の慾望によつて、自己の自我に訴へて、よりよき善に到達せんを努力するものである。努力を繼續して善に到達したる時には、既により高きより深き將來を想像して現在の到達點に對して、不満を感じる。再び慾望によつて満足せしむべく努力する。

かく善はそれから夫へ進展して行く。慾望と善との關係は形と影との關係の如く、追へども進んで止まない。併し影の到底握る事の出来ないとは變つて、一回一回把握され、到達されて、其度毎により深く擴充されて行く。時々刻々理想は實現されて行く。茲に人間の進化と向上とがある。

かう考へて見るに固定善がありとも言へるし、又無いとも考へられる。その實現された一つ一つの各々に就て言へば、それ／＼のものは、その善に取つては固定した善であつたのである。けれ共それは靜的の見方である。善を人間生命の流れから見れば實現されて行つた一つ一つの善は、固定したものではなくて漸次進展して行つたものの過程である。吾



々はこの觀方に従ふ事が有意義である。吾人の生命の過程には、固定したる善はない。只流動してゐる善を追ひ、より高き、大なる善を創り出し、善を普遍的に投射しつつ自己を實現するにある。

故に吾人の現實には絶対的の善はない。窮極の善はない。個人としての最高善は、死によつて決定する。人は先天的能力と後天的の努力によつて出來得る限りの最高善を實現せんとして順次善を創造して行く。兒童に對しては、材料の上に學習の上に、訓練の上に此態度を養つて置かねばならない。

#### 第四 善の創造態度と客観性

自我の成長に即して善を創造さすの程度に訓練して行く時は、所謂兒童が氣儘に放縱に養成されてしまふ。夫は道德教育の改善ではなくて改悪だに憂慮するものがある。夫等の人は客観的標準によつて「かくすべし」「かくすべからず」云ふ規矩に従はしめる事がよい

到底兒童心理から見て不可能の事であるを考へるのである。

此點に就ては前にも述べた積りである。勿論、論者の如く、兒童心理を無視しては出來ない仕事である。然し兒童の有してゐる創造性がよし若芽的のものであるにしても、之を認めぬ事も餘りに無謀ではあるまいか。私はこの若芽を摘み取りたくない。むしろ、之に萬全の策を講じて生ひ立たせたい。さうでないに將來が恐しい。偉大性を發揮する能力を殺してしまへば、精神的に人間の死滅であるから。客観的規矩によつて指導して行く事も一の方法である。この時期もあるべき事を否認するものではない。併しそれは客観的に陶冶の爲めの仕事ではない。主観的に陶冶する爲めの準備であり基礎であり第一段階でなければならぬ。

創造態度に立つ以上、自由が根本となる。論者の案するのは茲である。もし無拘束な無秩序なものが養成されたとしたならば、それは、眞の創造態度、眞の自由が徹底しなかつたからである。之は創造の罪ではない。之を取扱つた教師その人が、自我の成長に即しな



かつた結果である。眞の創造、自由には放縱は免されぬ。客觀を無視する事はできない。眞に良心活動をなすべき眞に創造態度に立つて實現に努力するべき、實質的に於いては個人的であり、主觀的であり、特殊であるけれ共、形式的には、社會的であり、客觀的であり、普汎的である。故に常に自我の成長に即して創造態度を訓練して行くべきである。

### 第五 創造態度と煩悶

創造態度に立つときは、第一に生れて來るものは煩悶である。彼の二宮金次郎が叔父萬兵衛の理想にあきたらず、自ら理想を創造して、之が實現には、度々の強迫にめげず、その實現の方法を創造した。之に就ては大なる煩悶をしたのである。又高崎正風が慾望の調和的満足を得るまでには、終日食を探らずして煩悶した。その結果、大なる自己を創造したのである。一代の傑出者は、より大なる煩悶をなしその結果、優秀なる自己を實現した

ものである。

茲に言ふ煩悶とは、劣等生活を突破して、理想によつて統一されたる高級生活を創造する努力である。創造活動をなす前には、必らずや現在に對して何等かの缺陷を感じる。一面現在より優良なる或る理想生活を憧憬する。彼之之の矛盾により、そこに煩悶の生活を起す。而して理想に到達すべく努力する。從來の道德に於ては、煩悶を惡みされてゐた併し高級生活を創造する事が煩悶をなす以上、煩悶は人生生活の寶珠であつて、この煩悶苦惱の大なる人程、人を生獲得した人である。より高き理想生活をなしたる人である。從來煩悶を排斥された所以をえるに、煩悶の弊害の方面のみを見て恐怖してゐたものであつたと言つてよい。

凡そ煩悶には、三つの異つたものがあるを知る。第一は、

缺乏に對する苦痛の感ばかりで、たゞ之から遁れようと思つてゐるものである。此苦痛の領域を突破して到達すべき彼岸を認め得ないものである。之は煩悶生活が徹底



すればする程危険なものである。自殺者には、かゝる煩悶の結果のものが多し。

第二は

現在の缺陷に就ては、何等の感ずる處なく、只未來、理想を抱いて、之に到達しよう  
とあせるものであつて、空想家となり、誇大妄想狂にかゝるものである。

第三は

現在を意識し、未來、理想を憧憬し、そこに大なる缺陷を認め、現在に立脚して理想  
に到達せんことを努力するものである

第一は、危険であり、第二は、身の程を知らない空想家となり遂に厭世心を起すもので  
何れも尊ぶに足らない、むしろ排斥すべきものである。

第三は現實と理想との二元の格闘である。人生の苦痛とされてゐる點は茲である。現在  
を意識する事によつて、不満であり、理想に到達する努力に於て苦痛である。けれども、  
到達後は歡喜である。そこに煩悶は價值がある。

道徳的生活をなさしむる上は、大に煩悶せしめ、苦惱せしめ兒童ながらに、人生を創造  
せしめて行かねばならぬ。學習の上にも常にこの煩悶に陥れて開拓せしめて行く事が肝要  
である。

第六 創造態度と人生觀

道徳教育の使命は、觀方によつて色々の方面から考へられる。兒童をして常に創造態度  
に立たしめて、煩悶することによつて人生を開拓して行く事になれば、それは自ら人生觀  
を獲得さす事となる。

人生觀なるものは、人の立てたる標準に照して自己を解決するものではなくて、自分自  
身の立てたる標準によつて、評價して行くものである。故にその人によつて人生觀は異なる  
従つて評價が異なる。自己生存の價値を疑ふものもあれば、誇大視するものも出来る。

兒童に對して始終創造せしめ煩悶せしめてゐる間には、微弱にあるにしても兒童相應の



人生觀は生れて來る。教師の人生觀の響きは、不知不識の間に光と熱とを與へる。故に教師は完全に於て、圓滿なる人生觀を把握してゐなければならぬ。もし教師のもつ人生觀にして當を得なかつたならば、其根本より出づる修身教育は、亦百年河清を待つに等しい。従來の修身教育には、餘りに人生觀の把握に努力する必要が尠なかつた。今後は現在の社會狀態より見て、人生觀の教育に努力する必要がある事と思ふ。

茲二三十年前迄は、人生は價值ありや否を考ふるもの尠く、只學問上の遊戲となつてゐた。然るに最近に至つては、その點に一大變遷を來して、人生問題に頭を突き込むものが多くなつた。

之等の原因を見るに平等觀が強くなり權利の主張が甚しくなつた事とその根本をなしてゐる。

第一 現在の社會は、貧富の差が非常に甚しくなつてゐる。資本家は永久に富者であり、勞働者は永久に貧者である。然るに一方平等觀に基いて勞働者側に於ても、我も人なり彼れも人なり

の觀念に支配されて、遂に厭世觀を起すに至る。

第二 慾望が非常に増大して來た事である。而してその慾望は各方面に調和的に高潮する事は、文化の向上であつて喜ぶべき現象であるが、精神慾よりも物質慾に傾いてしまつた。分相應の思想は崩れて、我も人なり彼も人なりの思想によつて、同様に物質慾を満足せんとして厭世觀を起すに至るのである。

第三 従來の宗教は、その眞義に觸れてゐたか否かは別として、兎も角も一世を風靡して統一力を有してゐた。最近に於ては淺薄なる智識で以て宗教を疑ひ出し、今その過渡期にあつて何等人生問題に對しての努力を有してゐない。

かくの如き社會狀態より見て今後の修身教育は、單なる個々の徳目の解釋位では満足出來なくなつて來た。尋常科の五年六年になれば、たゞへ幼稚ながらも人生問題の眞髓の基礎を築いてやらねばならない。之れ亦困難であるこの評もあらう。尤も困難である。易々たるものではない。而し取扱はない譯には行かない。度々論じて來た如く、材料と方法と人にある事である。人生とは何ぞや。人生觀の種類如何。そんな概念を取扱ふのではない



矢張り具體的の事實的のものによつて扱つて行く譯である。且一方徳目の取扱ひもこの人生觀より生れて來るものである。総合的に言はゞ人生觀を取扱つてゐるものである。之は前にも述べた様に本科のみに限つたものではない。併し旗色鮮明なる任務を持つた本科では亦旗色鮮明に取扱はなくてはならない。

× × × × × × × ×

要するに修身教育は兒童の自然性を肯定し、之を基調として衷心的に純化し、淨化し、理性化して行くと共に、高學年に於ては、よりよき善の創造態度に立たしめて人生を把握せしめねばならない。之が修身教育の出發過程に終極を網羅したものであると信ずるのである。

### 第七 創造態度の訓練と教科書取扱の注意點

#### (拔萃)及教授の實際

高學年に至るに従ひ創造態度を訓練すべき教材は、次第にその數を増加する。併し高學

年に至つて始めて急に訓練すべきものではない。たゞへ微弱ながらも低學年から不知不識の間に、その取扱に注意せねばならない。矢張り他の項との關係上尋一の教科書に就て拔萃する。

#### 第二 時刻を守れ

一、之は前にも出して置いたが、「何時に寢て何時に起きよ」を迄行かない方がよい、そしてそこらは、兒童に考へしめる方がよい。各人に紙にかかして見るがよい。到底完全なものはない。點檢してやつて適當でないものには指導してやる。之位の事は何でもない様であるが、自ら理想を創るのであるから兒童から言へば、大した問題である。私の修身教育の努力點から言へば、亦貴重な仕事である。

#### 第十八 過をかくすな、

一、寅吉が投げた毬が隣の障子に當り、障子を破りし際の態度を説話するには、單に外部的に制裁的に訓練されてゐた習慣によつて、或程度まで無意識的に斷りを言つたとする



よりも、此間には相當寅吉の煩悶態度を味はして置く事がよい。子供は家庭教育の不注意の爲め、事の善悪等は考へないで、何でも早く不快より逃れようとするものである。子供ながらに、悪い云ふ事が明かになつた上で謝罪する言ふ態度を養ふ事が肝要である。

第二 時刻を守れ、第七 食べ物に氣を附けよ

第二十三 生き物を苦しめるな

一、第二の時刻を守れ。に於ては、犬の戯れを見てゐた時の一人の兒童の忠告。第七の食べ物に氣を附けよ。に於ては、青梅を食べんさせる時の兄の忠告。第二十三の生物を苦しめるな。に於ては、燕を苦しめんさせる時の兄の忠告。之等を直に禁止命令を見る事は、器械的に見過ぎる。友達に、妹に、弟に、自己の善を創造せしむる爲めに材料を與へたるものとして取扱ひたい。單に器械的に外部の制裁のみに盲從した云ふ事になつては創造態度は、いつが來ても養はれない。第二十四、人に迷惑をかけるな。の處でも教科書では、

オチヨ ガ ミチバタ ヘ ゴミヲ ステヨウ ト シマシタ。オトウサン ガ「ゴミヲ ソンナトコロ ヘ ステルト、人 ガ メイワクシマス」。トイツテトメテ キマス。

こなつてゐるが、私は矢張り、「人が迷惑します。」と云つたので、おちよは考へて、なるほご人の迷惑になる、と思つたのでやめました。と取扱つて行きたい。そんな事は、極めて簡単な様でも將來に影響する處は甚大なるものと信ずる。

上の學年になれば、今一段進んだ創造態度の材料が多い。何れも、かくせよ。かくすな。は望ましい事でない、いつも、かくすな。の代りには、之れでよからうか。それで満足するか。なきに代へて行きたい。かくせよの代りに、かうしたらどうだうか。この方がよいように思ふが。なきに代へて行きたい。彼れ等に幾分にも創造の餘地を與へて取扱つて行きたい。

尋常第三學年



教案

- 一、教材 尋常小學修身書卷三 學問
- 一、區分 第一時 金次郎の理想及實現方法の創造  
第二時 一家の再興方法の創造、訓話、教科書授與  
第三時 復習。教科書授與。所感發表。補充例話。自己の勉強方法の創造及批判

一、本次目的。

金次郎の學問に勵みし例話を提供し、之に感動せしめ、學問の必要を自覺せしめるに共  
に、修學の爲努力せんことを意志の傾向を作る。  
一方に於ては、自ら理想を創造し、之を實現せん爲めに大に煩悶し、工夫し、努力し、  
之が實現法を創造し遂に善を實現したる事を感知せしめ、之が態度を養ふ事に努力す  
る。

- 一、準備、挿畫擴大圖。
- 一、順序、

■ 學習心の喚起

- 1、前時の復習
- 2、金次郎の勉學
- 3、目的指示

■ 經驗獲得(間接經驗資料提供)

- 1、幼少より學を好む。
- 2、讀書時間の創造
- 3、反省
- 4、母の死
- 5、叔父の宅に於ける金次郎の働き振り



6、理想の創造

7、勉強時間の創造

■ 整理

■ 教科書通読

■ 考察

◆ 教授の実際。

■ 学びたい心を起さしめる。

イ、前の時間には、誰の事を学びしか。

ロ、金次郎の内は、どんな暮しであつたか

ハ、父は金次郎が幾つの時死んだか。

ニ、預けた末の子を取り戻して養ふため、金次郎はどんなに働いたか。

ホ、若し金次郎が、働きばかりしてゐて、勉強しなかつたらどんなになるだらうか。

ヘ、二年の時習つた勉強した人は(しなかつた人は)どうなつたか。  
ト、金次郎は、どうしただらうか。  
チ、金次郎は人十倍の勉強をしたのです。それでこの様に立派な人になつたのです。

掛圖提出

リ、そんな暇があつたらうか。

ヌ、目的指示

それは一通りの勉強のしかたではなかつたのです。自分で勉強のひまを考へ出して、學問をしたのです。

勉強しなければならぬ云ふ事も自分で考へ出したのです。勉強する時間も自分で考へ出したのです。今日はそれを調べて行かう。

ル、皆さんは、どんなつもりで勉強してゐるか。

ヲ、毎日勉強する時期は……。時間は……。それで満足してよからうか。



■ 間接經驗資料を受け容れる。(事實に連絡して創造して行く。)

1、幼少より學を好む。

先生は少年の頃より學問好きであつた。常に本が讀たくてしかたがない。併し家が貧しいので逆も師匠の内へ通つて稽古する事が出来ない。

時々近處の御師匠さんの内へ行つて、弟子達の稽古してゐるのを櫛側で聞いて、その記憶のよいに驚かれた位であつた。

また夜々時々おぢいさんや、御父さんに、本を讀む事や、そろばんのけいふをした。

内が貧乏で筆紙を買ふ事が出来ない。そこで丸盆を持つて行つて酒匂川の砂を盛つて歸つて其上に杉箸で字を書いて習つた。先生は勉強する事が大好きで、一度や二度は御飯を食べないでも勉強する方がよい云ふ位であつたから又格別に上達した。

2、勉強時間の創造

御飯を食べるよりも好きだから、しつかり勉強したいが、そんな暇がない。始終食べる

所の心配をせなければならぬ。

そこで晝は、山へ薪を探りに行く、夜は繩をなひ草鞋を作る。だから勉強の暇がない。然し勉強はしたい。色々考へた。

◎晝、夜共一生懸命に働いたがいつ勉強する事が出来るか。

休む時間にする云ふものや、勉強時間を半時間位ゆるしてもらふ云ふものや、乃木大將の活動寫眞を見た時に餅を賣りつ、大學云ふ本を讀んでゐながら、二宮金次郎も山へ行きつ、本を讀んだであらうと答ふるものや、中には、逆も勉強する暇はない云ふものもある。小才子の兒童は夜業の後にする云ふものもある。

その結果、晝は山へ薪を探りに行く道のゆきかへりに、大學を大きな聲で讀んで通つた。まだその時分は、世の中の人が、そんなに勉強しないといけない云ふ事に気がつかない時であつたから、金次郎の風を見て氣狂ひになつた云ふて嘲けた。金次郎は、知らぬ顔して一心不亂に讀んで行つた。夜は草鞋を作る傍に大學を置いて勉強した。



◎君等の勉強の時間や、場所や、學用品や、其他金次郎と比較して見よ。

各自その比較した所を發表する。何れも金次郎に同情が起ると同時に感嘆の辭が出る。中には自分も、その様な境遇にあつたなら、金次郎位の事は出来ると思はれるものもある。

3、母の死

父が死んだあはれ不幸な金次郎には、又もや不幸が降りかかった。金次郎十六歳の時、母は病氣にかかった。打續いた不幸に、母は非常に疲れて床に臥した。金次郎は父を失ひ、又母の病氣に驚きて種々介抱に力を盡した。その甲斐もなく十日余りの病氣で遂に亡くなつた。

金次郎は十六、三郎左衛門は十三、富治郎は四才、三人は母の死骸に取りついて泣き叫んだ。

◎此三人で之からどうするか。

親類の内へ頼んで行くと言ふものや、金次郎が一生懸命に働いて二人の弟を養ふと言ふものや、

近所の人が助けに来て呉れると言ふものもある。

此時金次郎の内の財産はすつかりなしになつてゐた。少しばかり残つてゐた田や畑は賣つてしまひ、家の諸道具までも賣り拂つて藥代や、暮し向きに使つてしまつた。それでも小供三人で暮して行く事は出来ない様になつてゐた。

そこで親類の人々がよつて来て第二人は母の里方へ、金次郎は叔父の内へ預かつて歸る事になつた。

◎もし君等の内にこんな事が起つたらどうなるのか。

姉さんがあるからかまはないと言ふものや、池田に叔父があるから行くと言ふものや、大きくなる迄家にあるお金で暮して行くと言ふものなどざりざりである。こんな時にあまりどうするのがよいなと言ふ限定してはならない。

4、金次郎の働き振り

叔父萬兵衛は割合に、何でもやかましく言ふ人でした。中々金次郎の働き振りなごも、やかましく言つて、下女か下男かの様に使つた。



金次郎は叔父を怨むどころか色々世話になつてゐるから一生懸命にせねばならぬ、よく叔父の命に従つて、晝は一生懸命に仕事をなし、夜は夜業をして、人の二倍の働きをした。

5、金次郎の理想の創造

或日金次郎は、つらく思ふ様、今自分は父母を失ひ、人の内に世話になつてゐる。さて成長して二宮家を興し、人の爲め世の爲めにつくすには、學問がなければ到底出来ない。之から勉強をしようと思へた。

◎君等も何の爲めに勉強してゐるか。勉強する事が第一だ。そんな事を考へて見た事があるか。一寸刺激を與へるだけに止める

兒童等は顔見合せて、そんな事はないと云ふ様な顔してゐる。中には低い聲で、金次郎は年をこつてゐるからだ、なごこ洩れて聞えて来る。解決などはしない。サツサと進行して行く

6、勉強時間の創造 煩悶

自分は、今後勉強せなければならぬ、と決心した。しかし晝夜の業を廢する譯には行かぬ。勉強はしたいが暇は無い。さうしようかと煩悶した。苦心した。色々考へた末に、晝夜業を一生懸命にして、人の寝たあとで本を讀まうと決心した。

或夜から計畫通り人の寝た後勉強した。別に頼る先生もないから、只何遍も何遍も繰り返して讀んで行つた。素より惻かな金次郎だから、その内に大體は何の事を書いてあるかが分つた。何遍も讀んで行つてその譯が分る、分つた。分つた。叫んで喜んだ。

7、叔父の差止めと煩悶

金次郎は、その様にして勉強した。今晚も夜業をすまして皆が寝てしまつたから、本を出して一生懸命に讀んで行つた。其時後の方から

「金次郎何をしてゐるか」と云ふものがある。ふいと顔をあげる叔父であつた。その顔色が變つてゐる。

叔父は



「お前は、もう年が大分行つたでないか。よう考へて見よ。お前一人を養ふにぎれだけの金がいつて居ると思ふか。お前一人が働いた位では、その半分にも足りないでないか。それにそんなに餘分に油を使つてそれでもよいか」を吐鳴つた。

金次郎は只「ハイ」を言つて考へてゐる。叔父は詞をついで「家は崩れかかつて、はいれなし、田や畑は皆よその人に賣り拂つてしまひ、何も無いものが、學問して何になるか。やめてしまへ」

と言つて火を吹き消してしまつた。

◎金次郎に代つてさうするかを考へて見よ。

もう勉強をやめるを云ふのもある。親戚の人に云ふて勉強をさして呉れる様に頼んでもらふを云ふものもある。叔父さんの仕方が悪いから叔父さんの内におない様にするを云ふものもある。前例に倣つて晝の仕事の休み時間や、夜業しつゝ、讀むといふものもある。茲に至るを金次郎だけの創造は出来ない。

金次郎は眞暗の中に坐つて考へた。家は無し。田畑はなし。するから猶更學問せねばならぬ。學問しなければ何の事も分らない。分らなければ、二宮家を興す事も出来なければ、國の爲めにつくす事も出来ない。叔父さんの言つた事と違ふ。こんな事があつても勉強して家を興し國の爲めはつくさねばならぬ。

併し叔父さんの言つた如くに、人の家に世話になつておりながら、餘分に叔父さんの内の油を使ふ事はよくない。之は叔父さんの言つた方がよい。

勉強はしたし、油はつかではよくないし、買ふには金はないし、さうしたらよいかと一晩考へた。みんなにかして油を買ふ工夫は無いかと何日も考へた。

8、創造の決行

或日川の邊りを通つてゐた。見るに大水の爲めに荒れた土地がある。之に限るを喜んで人の休む時には、此處へ来て、草木の根を掘り取り、石をのけた。立派な畑が出来たので油菜を蒔いて八升程を得た。



喜んで町に持つて行き油を換へて来た。夜業をすましてあきで、前の如く大學を一生懸命に讀んだ。今度は自分の油だから安心して讀んだ。分らない處は何遍も讀んで、解釋がつくまで「分つた分つた」と言つて喜んだ。

或夜叔父の萬兵衛が見付けて

「誰じや、今頃起きてゐるのは」

「私でございます」

「金次郎か。この間言つて聞かしてあるに、又しても本を讀むか」

「お暇を頂いて讀んで居ります。油は私が買ったものでございます」

「それは言はないでも知つてゐる。百姓の子に學問はいらぬ。やめてしまへ。若し眠むたくなくて本が讀めるのなら繩をなへ」

大きな聲で吐鳴つて行つた。

金次郎は、又考へた。こんな事があつても勉強せなければならぬ。百姓だつて學問が要

らない事はない。誰だつて勉強しなければ一人前のものにはなれない。と、考へた。然し少しも叔父を怨まない。叔父の内に世話になつてゐるのだから、出来るだけの事はしなければならぬ。と考へた。

金次郎は、叔父の理想は飽まで反對であつた。その理想の實現に就ては、第一油の問題で迫害を受け、次に時間の問題で中止を命ぜられる。最早行き詰つてしまつたの感がある。

◎今後金次郎は如何にするか。

一先勉強を中止するに云ふものもある。何處までも止めないに云ふものもある。

◎然らば如何なる方法によるか。

叔父さんの内から歸ると云ふものが尤も多い。中にはお休みの日だけ勉強するに云ふものもある。金次郎は色々考へた。叔父さんに、なるべく迷惑をかけない方法はないだらうか。油を自分で買ふ事にするに勉強の時間に繩をなへと言ふ。みんなにするのが一番よからう



かき毎日考へた。

それからは、いつもよりは夜業を二倍位してズツト夜更けてから行燈に火を點じ、衣服を上からかけて、他へ光が洩れない様にして、それから「分つた分つた」は言へないから黙つて勉強した。

叔父も、金次郎のいよく學問したい風が見えたのでその熱心を感じて何事も言はない様になつた。金次郎が勉強して後寝に就くのは鶏が曉を告ぐる頃であつた。

■ 整 理

- 1、金次郎は、人間には何が一番大切だか考へたか
- 2、それは人に聞いたのか
- 3、紙や筆が買へないからどうしたか。
- 4、それは人に聞いたのか。
- 5、叔父の内へ行つてどんな事を考へたか。

- 6、それは人に聞いたのか。
  - 7、いつ勉強したか、叔父は何と言つて止めたか。
  - 8、金次郎は、どんなにしたか。
  - 9、それは人に教へて貰つたのか。
  - 10、再び止められて後はどうしたか。
  - 11、それは人に教へて貰つたのか。
  - 12、金次郎がした事は、凡て誰が考へた事か。
  - 13、人が考へた事、自分が考へた事、何れがよいか。
  - 14、君等の行ひは、人の考へが多いか、自分の考が多いか。
- 教科書を讀ましむ(二回)
- 考 察
- 1、金次郎の境遇と自己の境遇と比較せしむ。



- 2、金次郎の行爲は善か悪か
- 3、若し叔父の言葉にそむいたもので、後でそれが悪くなつたらさうか。|| 永久性 ||
- 4、勉強すること云ふ事はよいが、それが爲に仕事をし無かつたらさうか、  
|| 全 我 性 ||
- 5、一家の再興のみの爲めに勉強したとしたならばさうか。  
|| 社 會 性 ||
- 6、もし人に強いられた上であつたらさうか、  
|| 創 造 性 ||
- 7、自己の行爲を比較して發表せよ。

## 第九章 個性發揮と完全善の實現

### 第一 人格實現は個性の發揮

善は哲學的には自我の實現であり、倫理的には人格の實現である。心理的には、自己内面の要求の満足であり、社會的には個性の發揮——社會我の實現である。

既に述べたる如く、善行爲は人格的に、先驗的に、良心的に、之等の動機より發したる處の行爲である。如何なる行爲であつても、衷心的要求のものでないならば、その價値を認める事は出來ない。之等は所謂道德の形式的方面より眺めたる事であつて、之を内容的方面より具體的に觀察するならば、それ等の内容は如何なるものであらうか。

吾人の尤も努力すべきものは、人格の實現である。人格の形式的要素は、自覺、理想、統一である。而して内容的方面は、個人的社會的活動の全部である。實現は、潜在して



ゐるものの表現である。本來其者自身に有する處の力を現實に表はし漸次發表させる事である。

人性には發展力がある。或物になるだけの力が備はつてゐる。生れ落ちるこゝ、それは貧弱ではあるが、將來完全に近き人格者になり得るだけの高貴なものを享有してゐる。此高貴なものを無限に進展させて獨自的のものを發揮させる事に努力すべきである。

人格の實現は、我々の個性に於てなされる。個人に既に有してゐる處の、他人がかはる事の出来ない性格に於て、それを發揮する事に依つて實現されて行く。吾人の知識感情意志はみなその人に特有なる性質を具へてゐる。

此個人性は、人間が此世に生れると共に活動を始め、死に至る迄種々の經驗と境遇とに従つて發展を爲す。此個人性の道徳的實現善云ふ事が出来る。個人性の實現であるから個人に採つて満足である。他人の模倣の出来ない自家獨特のものである。此一あつて二なき實現を爲す事は、個人にまつて満足を與ふるばかりでなしに、社會進歩の上に必要缺ぐ

る事の出来ないものである。

個人性の發揮云へば從來かく賤まれたものである。けれ共人格者の歴史を見るならば、誰れにも實現し得る處を實現し得た處に、その價値を認められたものはない。その人にして始めて爲し得た實現は、他人は到底之を摸する事が出来ない。之を實現した人が偉人である。勇氣か節約か、忠君か慈善か何れにしても獨自性のももの實現である。その個性は個人的に發揮さるゝも社會的に發揮さるゝも、何れにしても凡て價値的のものである。個人性の發揮云ふ活動の中には、その個人を目的として表現する場合も社會を目的として表現する場合も考へられる。個人的善にしても社會的善にしても、個性の發揮云ふ事によつて實現するより外に實現の方法はないものである。

個人的善云へば直に個性發揮云ふ事に聯想され易く、社會的善云へば、個性發揮と非常の距離のあるものも考へられ勝である。けれ共社會的善も、個性發揮に外ならない。只研究の便宜上個人的善と社會的善に分つただけであつて、其本質に於ては個性の發



揮に外ならないのである。社會の發展と言ふ事は、個人の完成への道であり、個人の完成には社會への貢獻云ふ事が包含されてゐなければならぬのである。

個性は、他の個性と同一でない。何等かの特異性を有する處の統一體である。個性には此統一性と特異性が必要條件である。なほ之に不可分性をも含まねばならぬ。眞の個性發揮は、天賦境遇の異なる自我を通して、理性的價值を實現する事である。個性尊重とは、普遍的個性を尊重する事である。價值創造としての個人性を發揮する事である。勿論自然的個性を全く無視する事ではない。自然的個性をして價值的の個性に造り上げて行く。之が教育の仕事である。

此個人性の上に立つた個人的善は社會的善と何等衝突するものではない。此意味に於ての個人的善が、社會的善の基礎を爲すものと考へてよい。個人的善と言ふは直に私利私慾的のもの様に考えられ勝であるが自己の利益快樂を目的とした利己主義とは全く異なるものである。

## 第二 個性發揮と社會的善

社會は、人々人々の意志の結合である。意志とは知情意を超越したものである。意志は先驗的のものである。社會は、普遍的妥當的先驗我のつながりである。川原に於ける無數の石塊の集合は自ら異つてゐるものである。此社會と人々の關係を自覺してゐないから社會問題を惹き起すのである。眞に先驗我の結合なる事を目覺したならば、忌はしい社會問題は起ることはない。

現實の社會には種々なる上下の關係がある。主人と奴隸との關係によつて成り立つものもあるし、資本主と労働者によつて作られてゐるものもある。けれ共問題の起る社會は、何れも先驗我の指示する處によつて結合されてゐない場合である。何れの組織にしても眞の社會の組織は人格的關係に於てのものでなくてはならぬ。人格關係の社會とは、其社會の凡ての人を人格者として尊重する組織である。凡ての社會上の事は、人格の尊嚴の爲め



の施設及現象である。政治も教育も経済も道徳も凡て人格價值のみに統率される處のものでなければならぬ。權力關係や利害關係や、情實關係によつて組織されたものは眞の社會ではない。

併し現實の社會は全部人格關係に於て組織されてゐるかと言へば、前述したる如くその程度には達してゐない。けれ共達してゐないから人格關係でないとは言へない。凡ての成員の人々が、人格關係に於て社會を組織すべきであるを自覺してゐないまでである。廣義の教育は、各員に此關係を自覺せしめる事に勉めるにある。

さて社會は人格實現の關係に於ての結合である。個性の先驗我普遍我の連續である。社會的善は、社會一般を目的としたる善である。社會の進展への道徳的貢獻である。人間の自我の發展は、最初は先驗我的活動として一部分である。主として經驗我的活動である。自己の中心は經驗的の自然的の自己にあるが、自我の成長發展につれて漸次先驗的中心を求める。益自我の成長發展につれて、自己の中心は、自己が愛する人及自己が屬す

る社會(家庭、國家、世界)の凡ての人を對象として活動するに至る。自己は自己の中に見出すよりも、自己を子の中に、妻の中に、家庭の中に、社會の貧しきものの中に、病めるものの中に、社會の文化の中に、君主の中に、世界の中に、自己を見出す様になつて來る而して之は自己を對象とした善は矛盾衝突しないものである。

人は自我が成長して人格が偉大になればなる程、自己の要求は社會的になつて來るものである。

### 第三 個性發揮と家庭的善

社會組織の階級に就て見るに、社會的關係に於て、尤も人間として直接關係のあるものは家族である。家庭は社會組織の最小なるものである。我々人間が生れ落つるに直に關係づけられるものである。

夫婦關係の觀方は色々に考へられる。男女合して一家族を爲す目的は、子孫を残すため



性慾満足のため、収入増加のため、寂漠を慰むるため、一家維持のため、活動の分擔便宜の爲等種々に觀察する事が出来る。併し之等は何れにしても、外面的、淺薄的、不徹底なる觀方である。かく意志以外のものに結ばれたる家庭は、悲慘、寂漠ならざるを得ない。分裂せざるを得ない。

人類の完全なる典型より見れば、男子の性格が果して人類として完全であらうか。一概には言へないが、大體に於て、男子は豪膽であるけれども綿密でない。大量であるけれども微細なる考慮を缺く。突進はするが輕卒である。かゝる缺點を享有する處の男子が、社會に立つて大事業を爲さんとする事は、必ずや内助の大なるものが需要である。それは男子の人格が人類的に完全でないからである。

有島氏の死に對して、中村先生評して曰く「有島氏は社會的にかなり大なる事業をした人である。然るに此大事業を爲すに當つては、必ずや内助の對象を有する。然るに妻の死によつて人格に缺くる處がある。人格に空を感じる處がある。時偶々一婦人によつてそ

の人格の缺を充たされる處の境遇に逢ふた。其處に根據を求めたい」此一般の人の言はない處を述べられてある。

女子の性格だつて人類の完全なる典型ではない。殆んど男子の反面の長所と短所とを有してゐる。プラトンの考によれば、元男子と女子とは、一體であつたのだ。それが神によつて分割された。故に一個の完全な人間としては、二つを合さなければならぬ。分割された一つは完全なものではない。故に今になつて男女が互に戀ひ慕ふのは、一に歸する爲めである」此。之れは幾等か神秘的であるが、誠に深遠なる精神的目的のある事の了解が出来る。よく夫婦の生活を「+」の生活でなければならぬと言ふが、考へれば「+」は既に完全獨立を意味するものである。故に、「+」を見る方が適當と言はねばならぬ。故に、眞に人間としての個性を考ふれば實は、「+」ではなくて、「+ + + + + = 1」。男+女+」でなければならぬ。

さて家庭的善は何によつて得らるゝが。之は個性發揮より分ない。夫は妻の人格を尊重







家族について、共同意識の全體を統一し、一人の人格の發現を見る事の出来るものは國家である。此の國家によつて個人も家庭も社會組織も安全に保持發達せしめるものである一體國家の目的を、主權の威力に置くものには、外敵を防ぎ、生命財産の保護を爲すものである。然るに之を個人の上に置くべきは、人格の調和的發展なる。國家は、一の統一したる人格體である。人格體として統一的に活動してゐるものである。主權に中心を置く事も出来ねば、個人に中心を置く事も出来ない。國家の組織より言へば、主權者も個人も凡て共同意識の發現者である。

國家は、一の人格の統一體であるが故に、國家全體より見れば、絶対價値の人格的表現をする事が目的である。主權者は、此目的に副ふべきものである。主權者も人格の實現者であり個人も人格の實現者である。そこで、主權者の統一的人格と個人の統一的人格とによつて、眞の人格實現が出来るのである。國家が色々の制度を設けて、種々の施設を爲す所以のものは、一に國家としてよりよき統一的な人格發現を爲さんが爲めである。

若し個人全部が統一的な人格完成者ならば、國家としては何等の施設を要しない。併し現實の人間には完成者はない。只人格へ人格へ努力してゐるものみの集合である。そこに國家としては、法律其他の施設を要するものである。

君主が國家の發展完成へ努力する事は、個人の人格尊重の上に立つものである。個人の人格がよし完全でないにしてもそれは問題ではない。完成してゐない處の人格を尊重せなければならぬのである。而して人格完成へ努力するにあらねばならぬ。主權者は個人を人格視し、之を愛する處に國家の發展がある。個人の人格を敬愛しない國家は滅亡の國家である。現在隆盛であるにしても、それは一時的のもので一日一日と衰運に赴く國家である。

國家が個人を罰するといふ事は、その惡に對する報酬ではない。單なる社會の安寧秩序を維持するためではない。只個人の人格を尊重して、それを何處迄も成長發展せしめんとする愛の鞭に外ならない。而して個人の人格の完成へ、國家の人格的完成へ進まず爲